

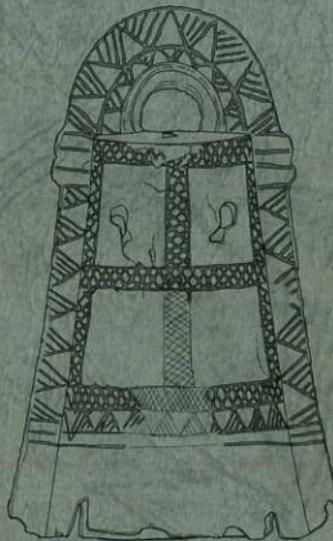
堺市下田町所在

下田遺跡

—都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書—

(第一分冊)

第Ⅰ部 本文篇



1996.12

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

堺市下田町所在

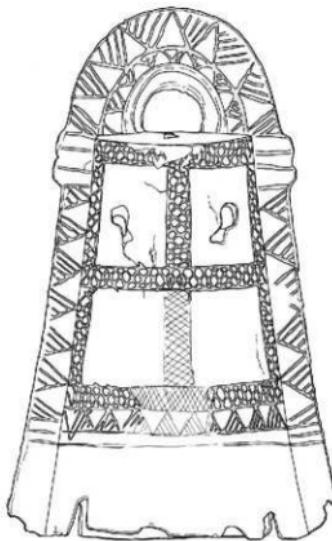
し も だ

下田遺跡

—都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う発掘調査報告書—

(第一分冊)

第Ⅰ部 本文篇



1996.12

財団法人 大阪府文化財調査研究センター



下田遺跡遠景（南から）





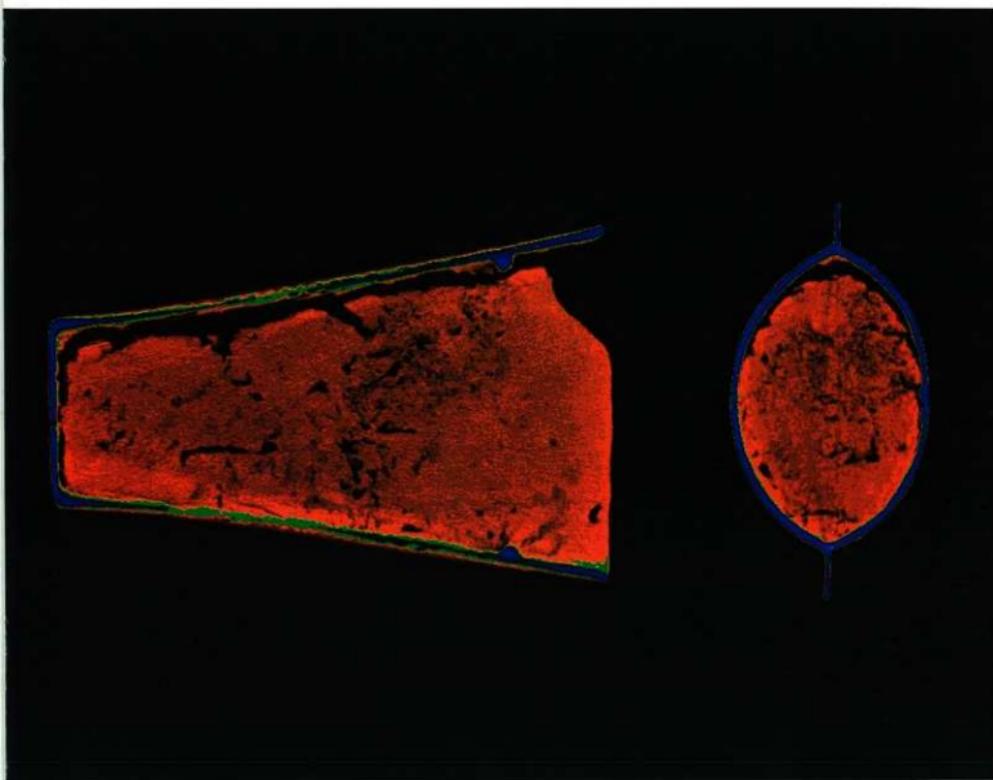




銅鋤表面の経時変化

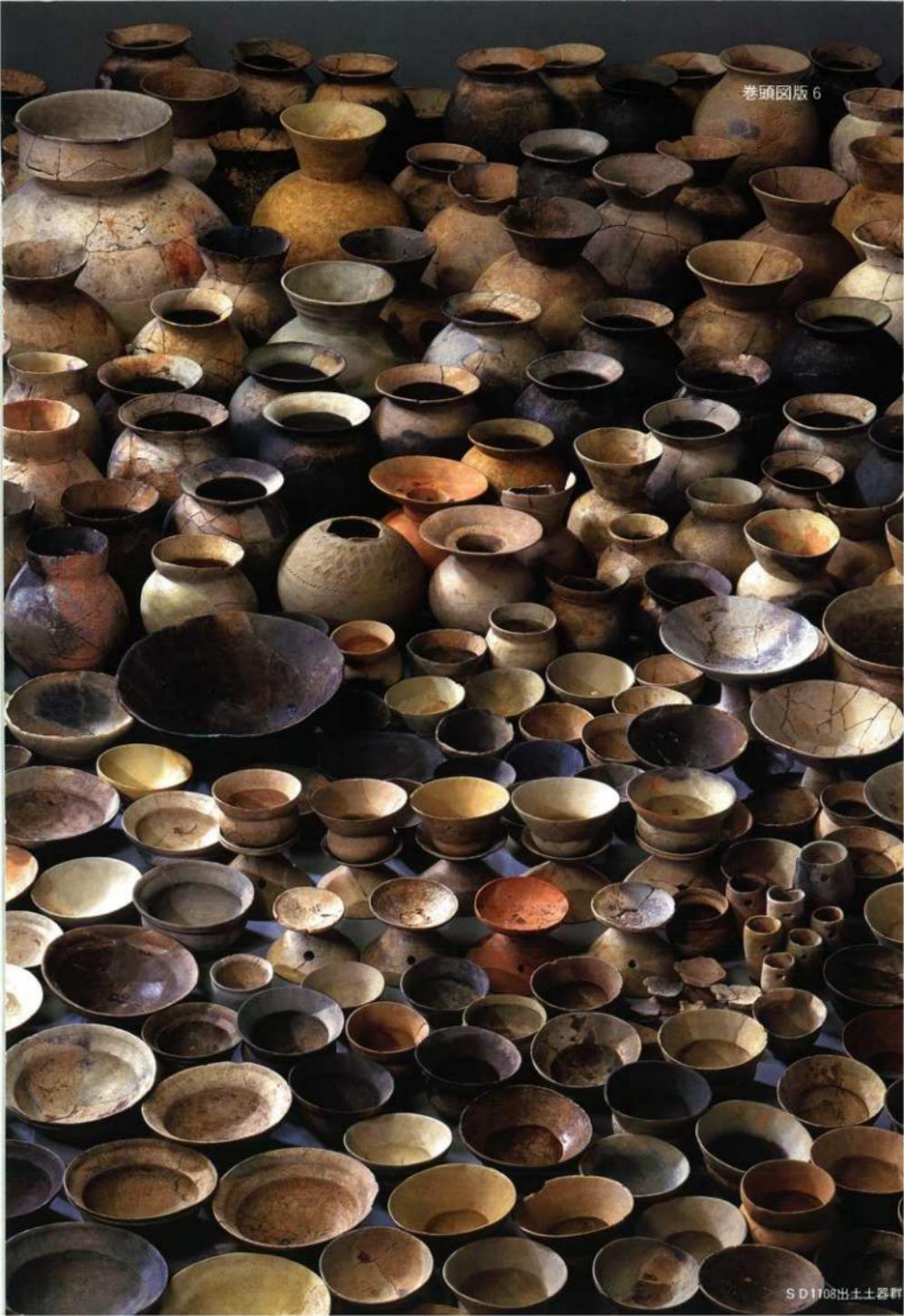
- 1 検出後 2 時間経過 脂、裾、型持孔、鋤周縁などが黒変する。鋤身は金属色を呈する。
- 2 検出後 6 時間経過 周縁に始まった錆化が鋤身に及び、全体的に金属色を失う。
- 3 検出後10時間経過 全体的に暗赤黒色に錆化する。





銅鐘内部充填土のX線CT画像

画像上方が検出時の上側にあたる。鐘身内部は微砂で満たされていたが、縦断（左）、横断（右）とも、鐘身の上側には微砂の圧縮による空隙が存在する。また微砂の密度は均質ではなく、多数の小さい空洞が生じている。従って、微砂は埋納後の自然流入とは考えられず、埋納前にブロック状の土塊が人為的に充填されたと認められる。





S D 1108出土木器
左 環形付木製品
右 刀剣把装具
(ともにほぼ原寸大)



S D1108出土木器
琴上板下面

序 文

財団法人大阪府文化財調査研究センターが発足してから、早くも1年が経過致しました。ここに報告します下田遺跡は、本センター発足以前に財団法人大阪府埋蔵文化財協会によって調査されました。整理の途上で協会は財団法人大阪文化財センターと合併を果たし、事業はそのまま本センターへ継承され、今回の報告書が完成した次第でございます。

下田遺跡は堺市下田町に所在する複合遺跡として知られ、周辺地域ではこれまでに幾度か調査が行われており、際立った成果が挙げられております。また周辺には和泉地方の弥生時代を代表する四ッ池遺跡や、古墳時代では国内を代表する百舌鳥古墳群などが分布し、歴史的にみても重要な位置に所在すると言えるでしょう。

ここに報告致しますのは、このたび都市計画道路常盤浜寺線建設に先立ち、大阪府土木部鳳土木事務所の委託によって、発掘調査を実施した結果をまとめたものです。試掘調査を含めて平成4年度から同6年度にわたって実施された調査では、縄紋時代から古墳時代・近世の遺構・遺物が数多く出土しました。詳しくは本文に記すとおりありますが、なかでも銅鐸の出土は予想外のものであり、堺市内で5例目の出土例となりました。また弥生時代後期から古墳時代前期の遺構・遺物がまとまって出土し、この激動の時代を物語る様相を呈しておりました。

なお、調査並びに報告書刊行にあたっては、大阪府土木部鳳土木事務所・大阪府教育委員会・堺市教育委員会、地元各位をはじめ関係各位には、多大のご助言、ご理解を賜り、深く謝意を表します。また今後とも本センターの事業にご支援、ご指導いただきますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

平成8年12月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター
理事長 坪井清足

例　　言

1. 本書は大阪府堺市下田町地内に所在する下田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は都市計画道路常盤浜寺線建設に伴う事前調査として実施した。
3. 調査は大阪府土木部鳳土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。
4. 調査の実施日程は以下の通りである。

試掘調査 1993年2月8日～同年3月9日

1次調査 1993年5月11日～1994年3月25日

2次調査 1994年6月13日～同年10月31日

5. 調査は試掘～2次調査まで財団法人大阪府埋蔵文化財協会が委託を受け、調査課技師、西村 歩・仁木昭夫・秋山浩三(以上、固有職員)・中川義朗(阪南市から出向)・河田泰之(泉南市から出向)が現地調査を担当した。各自の主たる担当地区は以下の通りである。

試掘調査 B-1～3区 仁木

1次調査 A-1・A-2区 仁木

B-1～3区 西村・秋山

2次調査 A-3区 西村・中川・河田

6. 作図は主として航空測量によったが、主要遺構は適宜実測による記録作業を実施した。航空測量では、1/20・1/100の平面測量図(遺構図・コンターライン図)の作成、及び航空写真撮影を行った。

7. 整理作業は主として西村が担当し、仁木が補佐した。

8. 遺構写真是各調査担当者が撮影した。遺物写真撮影及び遺構・遺物写真の焼付けは、立花正治・小倉 勝が担当し、久禮孝志・加茂幸彦・瓜崎恵美子が補佐した。

9. 本文篇の執筆は第5章第1～3節を仁木が担当し、同第4節を三木 弘氏(大阪府教育委員会文化財保護課)に依頼した他は西村が担当した。文責は本文篇では目次、分析篇・考察篇では本文および目次に記した。なお、執筆者の意向を尊重し、本文篇では用語、分析篇・考察篇では用語と節以下の記述方法や体裁について、あえて統一を図らなかった。編集は西村が行った。

10. 調査では、花粉分析・珪藻分析を川崎地質株式会社、熱残留磁気測定を株式会社夏原技研、種子同定を総合科学研究所にそれぞれ業務委託して自然科学的分析を実施したほか、次の各位より玉稿を頂戴している。

銅鐸の埋蔵環境 三ツ井誠一郎(動力炉・核燃料開発事業団 東海事業所 環境技術開発部
地層区分開発室)

久保田 満(㈱検査開発)

村上 隆(奈良国立文化財研究所)

土器砂礫分析 奥田 尚(八尾市立図書館)

土器付着物の成分分析 新野 靖(㈲塩事業センター 技術部 海水総合研究所第3研究チーム)

噴砂 寒川 旭(通商産業省工業技術院 地質調査所大阪地域地質センター)

年輪年代測定 光谷拓実(奈良国立文化財研究所)

11. 銅鐸は、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター研究指導部、村上 隆氏に保存処理を依頼した。
12. 銅鐸B面における銘文進行前の状況写真(巻頭図版3)は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部、佃 幹雄氏・牛嶋 茂氏の御厚意により撮影された。またCTスキャンの画像(巻頭図版5)も奈良国立文化財研究所が作成した。
13. 銅鐸のX線写真撮影は山口誠治が担当した。
14. 木製短甲の写真測量図(等高線図)は、アジア航測(株)に委託して作成した。
15. 調査の実施にあたり、大阪府教育委員会・大阪府土木部風土木事務所・堺市教育委員会をはじめ、関係諸機関・各位より格別の配慮を頂いた。
16. 調査及び報告書作成にあたっては旧協会・センター職員諸氏の協力を得、また次の各位より有益な御教示・御指導を賜った。記して感謝の意を表する。(敬称略・組織名五十音順・組織内五十音順)
森岡秀人(芦屋市教育委員会)、乾 哲也・白石耕治(和泉市教育委員会)、趙 哲濟(附大阪市文化財協会)、石神 怡・大野 薫・小林義孝・橋本高明・林 義久・山田隆一・渡邊昌宏(大阪府教育委員会)、廣田佳久(高知県教育委員会)、喜谷美宜(神戸市立博物館)、藤田和尊(御所市教育委員会)、池峯龍彦・近藤康司・土井和幸・樋口吉文(堺市教育委員会)、神谷正弘(高石市教育委員会)、岸本道昭(龍野市教育委員会)、上原真人・工楽善通・佐原 真・次山 淳・町田 章・光谷拓実・村上 隆(奈良国立文化財研究所)、酒井龍一(奈良大学)、笠原 潔(放送大学)、穂積裕昌(三重県埋蔵文化財センター)、米田敏幸(八尾市教育委員会)、奥田 尚(八尾市立図書館)、浅岡俊夫・古川久雄(六甲山麓遺跡調査会)、土井孝之(和歌山県教育委員会)、前田敬彦(和歌山市教育委員会)
17. 本書は現地調査、並びに整理作業を通じて、大勢の方々の協力により成立している。記して感謝の意を表する。(敬称略・五十音順)
秋好洋子・浅木 薫・浅田加夜・泉 志先・稻岡亜希・稻岡知美・今井保子・今橋朱美・上松敏子・植村弘子・江口和賀・緒方優子・沖野節子・長 育代・乙女さおり・小原睦子・角野孝子・角野尚代・北野和子・北野敏広・久保洋子・黒川敦美・坂本けい子・迫田信子・高山明子・滝野百合子・瀧藤育雄・田口雅敏・竹本重行・田島夕美子・立石京子・田中君子・谷岡圭子・地徳由紀恵・土川千波・徳田栄子・長尾 恵・中山武代・納谷好子・西川アサエ・西田久美・西村俊幸・二宮サキ子・東野穂満・星由美子・牧 明美・松井晴美・松井利恵・松村より子・三島けい子・南出香織・三野知子・三山法子・宮本幸雄・森本浩司・八木孝子・山尾温子・山本秀和・山本 浩・山本晶子・横谷安也子・若井キヨ子・渡邊恭子・渡邊みどり・和田しづか
18. 各国語要旨の訳出にあたり、次の各位の御協力を得た。記して感謝の意を表する。
英語訳は有井宏子氏(大阪府教育委員会)による。韓国語訳は横田 明氏(大阪府教育委員会)により、文章表現は李 栄烈氏(韩国学園)が点検した。中国語訳は徐 光輝氏(龍谷大学)の指導を得て山元建(当センター)が行った。
19. 調査にかかる出土遺物・実測図面類・写真・ネガフィルム・カラースライド等の全資料は、財団法人大阪府文化財調査研究センターで保管している。各方面での幅広い活用を希望する。なお旧協会の作業で、2次調査まで下記の調査コードが付与されている。資料の検索等に利用されたい。

下田遺跡試掘調査(事業名「下田遺跡試掘」) 92-01

下田遺跡1次調査(事業名「下田遺跡」) 93-10

下田遺跡2次調査(事業名「下田遺跡(その2)」) 94-05

凡 例

1. 調査にあたっては国土座標第VI系を基準に、協会が「発掘調査規程」に定めた地区割方法を使用した。その詳細は本文篇第1章第2節に記述した。遺構平面図には国土座標第VI系の座標値をX軸・Y軸についてkmで表示したが、kmの単位は省略して記載した。また現地調査では現況の地形に合わせた独自の地区割を設定しており、その内容を本文篇第3章第2節に記述した。
2. 遺構実測図その他の方位は、国土座標に基づく座標北を示す。なお座標北を基準とした場合、遺跡周辺の磁北はN-6°12'-Wに、真北はN-0°18'-Eに偏位する。
3. 標高には全てT.P.(東京湾標準潮位)+値を使用したが、本文中ではT.P.+を省略している。
4. 遺構番号は調査時点で旧協会の「発掘調査規程」の定めるところに従い付与したが、整理の段階で番号を再編成し、その対比表を本文篇第1章第2節に掲載した。新規の遺構番号は4桁の数字で表記し、上1桁についてA地区を1、B地区を2とし、さらに上2桁目は各地区内の小区を表す。すなわちA-3区は「13--」、B-2区は「22--」と表記して地区名を表す符号とする。下2桁は遺構の種類とは無関係に01からの連番号とし、同一番号が異なる遺構に付与されることはない。
5. 遺構の略号は下記の通りとし、遺構番号の前に冠した。

S A—堅穴住居、S B—掘立柱建物、S D—溝、S E—井戸、S K—土坑、S P—ピット・柱穴
S W—土器溜、S X—土器棺墓・その他、N R—自然流路
6. 遺物番号は、土器・木器・石器の種類ごとに連番号を与えた。木器・石器の連番号には種類を示す略号、W—木器・植物製品、S—石器・石製品の記号を冠した。土器は無記号、銅鐸は無番である。
7. 遺物実測図の縮尺については、土器・陶磁器を基本的に1/3、石器・石製品を2/3に統一した。木器は遺物の寸法によって適宜縮尺を変更した。
8. 土器実測図の断面は、中後期弥生土器・古式土師器のうち、胎土・色調等を肉眼観察し確実に撤入土器と判断した個体のみ黒塗とし、在地産の土器・あるいは不明の土器を白抜きで示した。すなわち白抜きの上器の中にも撤入土器が含まれる可能性がある。撤入土器では、特に庄内式壺について、生駒西麓産の胎土をもつ個体(庄内式壺A)を黒塗、それ以外の胎土をもつ個体(庄内式壺B)を網掛けで表示した。古墳時代中・後期の土器では土師器を白抜き、須恵器を黒塗とした。その他の時代、即ち縄文時代・中世以降の土器等は全て黒塗である。
- なお弥生土器・古式土師器における撤入土器の分別は、分析篇第6章における奥田 尚氏の土器砂礫分析とは別作業として実施しており、氏の分析結果との整合は必ずしも図られていない。
9. 木器実測図の網掛けは黒塗、あるいは炭化部分を示す。
10. 遺構実測図の縮尺は特に定めず、適宜設定した。
11. 調査・整理にあたって土色・土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』を基準として記録を行った。従って遺構の土色は原図には全て記録されているが、本書挿図では煩雑を避けるため一部省略した場合がある。土器の色調は、他の諸特徴と共に遺物観察表に記載した。
12. 本文・挿図・写真図版の遺構・遺物番号は全て一致する。

目 次

序 文

(財)大阪府文化財調査研究センター理事長 坪井清足

第Ⅰ部 本文篇	1
第1章 経緯と方法	(西村) 3
第1節 調査経緯	3
第2節 調査の方法	4
第2章 位置と環境	(西村) 7
第1節 地理的環境	7
第2節 歴史的環境	9
第3節 条里遺構	16
第3章 遺跡の概要	(西村) 19
第1節 既往の調査	19
第2節 調査の概要	23
第4章 調査成果	(西村) 34
第1節 基本層序	34
第2節 遺構と遺物	36
第1項 土器の観察	36
第2項 繩紋時代	40
第3項 弥生～古墳時代	45
第4項 中世～近世	326
第5章 銅鐸	333
第1節 銅鐸発見にいたる経過	(仁木) 333
第1項 銅鐸出土直前の調査状況	333
第2項 銅鐸の発見と対応	334
第3項 分析の経緯と結果	335
第2節 出土状況	(仁木) 336
第1項 埋納坑の立地	336
第2項 埋納坑と埋納の状態	336
第3項 埋納の時期	341
第3節 銅鐸の観察	(三木) 343
第4節 石津川流域の弥生時代遺跡と出土銅鐸	(仁木) 360
第1項 石津川流域の弥生時代遺跡	360
第2項 石津川流域出土の銅鐸	363
第3項 周辺遺跡と下田銅鐸	364

第II部 分析篇 369

第1章 下田遺跡から出土した銅鐸の埋蔵環境	(三ツ井・久保田・村上).....	371
第2章 下田遺跡出土銅鐸内部の土の花粉分析	(渡辺).....	383
第3章 下田遺跡における花粉・珪藻分析	(渡辺).....	385
第4章 下田遺跡出土種子の同定	(水谷).....	393
第5章 下田遺跡出土土器付着物の成分分析	(新野).....	397
第6章 下田遺跡出土土器の表面に見られる砂礫	(奥田).....	403
第7章 下田遺跡で検出された地震の痕跡	(寒川).....	415
第8章 考古地磁気年代推定	(夏原).....	423
第9章 ヒノキ製腰掛けの年輪年代	(光谷).....	429

第III部 考察篇 431

第1章 四区画袈裟津文銅鐸素描	(三木).....	433
第2章 下田遺跡出土の襦襦式木甲について	(神谷).....	481
第3章 戒儀具(塵尾)について	(藤田).....	487
第4章 出土した「四方転びの箱」	(仁木).....	493
第5章 大阪湾岸を中心とした土器製塩活動の展開	(河田).....	503
第6章 和泉北部の古式土師器と地域社会	(西村).....	523
第7章 総括		661

別 表 665

土器観察表		667
木器観察表		774

附 載 779

SHIMODA SITE(SUMMARY)		781
下田遺跡(한국어요지)		783
下田遺跡(中文抄譯)		787
下田遺跡関連文献目録		791
報告書抄録		792

挿図目次

第Ⅰ部 本文篇

Fig. 1 地区割模式図	5
Fig. 2 遺跡周辺地質図	8
Fig. 3 調査地周辺遺跡分布図	10
Fig. 4 調査地周辺地割・字名図	17
Fig. 5 石津川流域の条里地割	18
Fig. 6 全調査区の位置関係	20
Fig. 7 T S D - 1 遺構配置図	21
Fig. 8 T S D - 1 河道 1 出土土器	22
Fig. 9 T S D - 1 河道 1 出土蓋	22
Fig. 10 地区割詳細図	24
Fig. 11 A区主要遺構配置図	25
Fig. 12 A - 1 区遺構配置図	26
Fig. 13 A - 3 区遺構配置図	27
Fig. 14 A - 2 区遺構配置図	28
Fig. 15 B区主要遺構配置図	29
Fig. 16 B - 2 区遺構配置図	30
Fig. 17 B - 1 + 3 区遺構配置図	31
Fig. 18 基本層序柱状図	35
Fig. 19 土器の各部名称	36
Fig. 20 基本成形に関与する技法	37
Fig. 21 器面調整に関与する技法	38
Fig. 22 最終器面調整に関与する技法	39
Fig. 23 Tr.1・Tr.2配置図	40
Fig. 24 N R1302断面図(Tr.1)	41
Fig. 25 N R1302断面図(Tr.2)	42
Fig. 26 N R1302出土遺物実測図	43
Fig. 27 N R1303平面図	45
Fig. 28 N R1303断面図	45
Fig. 29 N R1104平面図・断面図	47
Fig. 30 N R1104出土遺物実測図(1)	48
Fig. 31 N R1104出土遺物実測図(2)	49
Fig. 32 N R1104出土遺物実測図(3)	50
Fig. 33 N R1104出土遺物実測図(4)	51

Fig. 34	N R1104出土遺物実測図(5)	52
Fig. 35	S W1157・1158平面分布図	53
Fig. 36	S W1157出土遺物実測図(1)	54
Fig. 37	S W1157出土遺物実測図(2)	55
Fig. 38	S W1157出土遺物実測図(3)	56
Fig. 39	S W1157出土遺物実測図(4)	57
Fig. 40	S W1157出土遺物実測図(5)	58
Fig. 41	S W1157出土遺物実測図(6)	59
Fig. 42	S W1157出土遺物実測図(7)	60
Fig. 43	S W1157出土遺物実測図(8)	61
Fig. 44	S W1158出土遺物実測図(1)	62
Fig. 45	S W1158出土遺物実測図(2)	63
Fig. 46	N R1207平面図・断面図	65
Fig. 47	N R1207出土遺物実測図	66
Fig. 48	S X1267平面図・立面図	67
Fig. 49	S X1268平面図・立面図	68
Fig. 50	N R2109平面図・断面図	70
Fig. 51	N R2109出土遺物実測図(1)	71
Fig. 52	N R2109出土遺物実測図(2)	72
Fig. 53	N R2109出土遺物実測図(3)	73
Fig. 54	S D1305平面図	74
Fig. 55	S D1305木枕詳細図	75
Fig. 56	S D1305断面図(1)	76
Fig. 57	S D1305断面図(2)	77
Fig. 58	S D1305出土遺物実測図(1)	79
Fig. 59	S D1305出土遺物実測図(2)	80
Fig. 60	S D1305出土遺物実測図(3)	81
Fig. 61	S D1305出土遺物実測図(4)	82
Fig. 62	S D1305出土遺物実測図(5)	83
Fig. 63	S D1305・5層土器平面分布図	84
Fig. 64	S D1305出土遺物実測図(6)	85
Fig. 65	S D1305出土遺物実測図(7)	86
Fig. 66	S D1305・4層土器平面分布図	88
Fig. 67	S D1305出土遺物実測図(8)	90
Fig. 68	S D1305出土遺物実測図(9)	91
Fig. 69	S D1305出土遺物実測図(10)	92
Fig. 70	S D1305出土遺物実測図(11)	93
Fig. 71	S D1305出土遺物実測図(12)	94

Fig. 72	S D1305出土遺物実測図(13)	95
Fig. 73	S D1305出土遺物実測図(14)	96
Fig. 74	S D1305出土遺物実測図(15)	97
Fig. 75	S D1305出土遺物実測図(16)	98
Fig. 76	S D1305出土遺物実測図(17)	99
Fig. 77	S D1305出土遺物実測図(18)	100
Fig. 78	S D1305出土遺物実測図(19)	101
Fig. 79	S D1305出土遺物実測図(20)	102
Fig. 80	S D1305出土遺物実測図(21)	103
Fig. 81	S D1305出土遺物実測図(22)	104
Fig. 82	S D1305出土遺物実測図(23)	105
Fig. 83	S D1305出土遺物実測図(24)	106
Fig. 84	S D1305出土遺物実測図(25)	108
Fig. 85	S D1305出土遺物実測図(26)	109
Fig. 86	S D1305出土遺物実測図(27)	110
Fig. 87	S W1159平面図	111
Fig. 88	S W1159遺物出土状況図	112
Fig. 89	S W1159出土遺物実測図(1)	113
Fig. 90	S W1159出土遺物実測図(2)	114
Fig. 91	S W1159出土遺物実測図(3)	115
Fig. 92	S W1360～1366平面図	116
Fig. 93	S W1360～1362遺物出土状況図	117
Fig. 94	S W1360出土遺物実測図	118
Fig. 95	S W1361出土遺物実測図	119
Fig. 96	S W1362出土遺物実測図	119
Fig. 97	S W1363遺物出土状況図	120
Fig. 98	S W1363出土遺物実測図(1)	121
Fig. 99	S W1363出土遺物実測図(2)	122
Fig. 100	S W1364遺物出土状況図	124
Fig. 101	S W1364出土遺物実測図(1)	125
Fig. 102	S W1364出土遺物実測図(2)	126
Fig. 103	S W1364出土遺物実測図(3)	127
Fig. 104	S W1365遺物出土状況図	128
Fig. 105	S W1365出土遺物実測図	129
Fig. 106	S W1366遺物出土状況図	130
Fig. 107	S W1366出土遺物実測図	130
Fig. 108	S D2206平面図	132
Fig. 109	S D2206断面図(1)	133

Fig.110	S D2206断面図(2)	134
Fig.111	S D2206出土遺物実測図(1)	135
Fig.112	S D2206出土遺物実測図(2)	136
Fig.113	S D2206出土遺物実測図(3)	137
Fig.114	S D2206出土遺物実測図(4)	138
Fig.115	S D2206出土遺物実測図(5)	139
Fig.116	S D1108平面図	141
Fig.117	S D1108断面図	142
Fig.118	S D1108遺物出土状況図(1)	144
Fig.119	S D1108遺物出土状況図(2)	145
Fig.120	S D1108土器平面分布図(1)	146
Fig.121	S D1108土器平面分布図(2)	147
Fig.122	S D1108木器平面分布図	148
Fig.123	S D1108出土遺物実測図(1)	150
Fig.124	S D1108出土遺物実測図(2)	151
Fig.125	S D1108出土遺物実測図(3)	152
Fig.126	S D1108出土遺物実測図(4)	153
Fig.127	S D1108出土遺物実測図(5)	154
Fig.128	S D1108出土遺物実測図(6)	155
Fig.129	S D1108出土遺物実測図(7)	156
Fig.130	S D1108出土遺物実測図(8)	157
Fig.131	S D1108出土遺物実測図(9)	158
Fig.132	S D1108出土遺物実測図(10)	159
Fig.133	S D1108出土遺物実測図(11)	160
Fig.134	S D1108出土遺物実測図(12)	161
Fig.135	S D1108出土遺物実測図(13)	162
Fig.136	S D1108出土遺物実測図(14)	163
Fig.137	S D1108出土遺物実測図(15)	164
Fig.138	S D1108出土遺物実測図(16)	165
Fig.139	S D1108出土遺物実測図(17)	166
Fig.140	S D1108出土遺物実測図(18)	167
Fig.141	S D1108出土遺物実測図(19)	168
Fig.142	S D1108出土遺物実測図(20)	169
Fig.143	S D1108出土遺物実測図(21)	170
Fig.144	S D1108出土遺物実測図(22)	171
Fig.145	S D1108出土遺物実測図(23)	172
Fig.146	S D1108出土遺物実測図(24)	173
Fig.147	S D1108出土遺物実測図(25)	174

Fig.148	S D1108出土遺物実測図(26)	175
Fig.149	S D1108出土遺物実測図(27)	176
Fig.150	S D1108出土遺物実測図(28)	177
Fig.151	S D1108出土遺物実測図(29)	178
Fig.152	S D1108出土遺物実測図(30)	179
Fig.153	S D1108出土遺物実測図(31)	180
Fig.154	S D1108出土遺物実測図(32)	181
Fig.155	S D1108出土遺物実測図(33)	182
Fig.156	S D1108出土遺物実測図(34)	183
Fig.157	S D1108出土遺物実測図(35)	189
Fig.158	S D1108出土遺物実測図(36)	190
Fig.159	S D1108出土遺物実測図(37)	191
Fig.160	S D1108出土遺物実測図(38)	192
Fig.161	S D1108出土遺物実測図(39)	193
Fig.162	S D1108出土遺物実測図(40)	194
Fig.163	S D1108出土遺物実測図(41)	195
Fig.164	S D1108出土遺物実測図(42)	196
Fig.165	S D1108出土遺物実測図(43)	197
Fig.166	S D1108出土遺物実測図(44)	198
Fig.167	S D1108出土遺物実測図(45)	199
Fig.168	S D1108出土遺物実測図(46)	200
Fig.169	S D1108出土遺物実測図(47)	201
Fig.170	S D1108出土遺物実測図(48)	202
Fig.171	S D1108出土遺物実測図(49)	203
Fig.172	S D1108出土遺物実測図(50)	204
Fig.173	S D1108出土遺物実測図(51)	205
Fig.174	S D1108出土遺物実測図(52)	206
Fig.175	S D1108出土遺物実測図(53)	207
Fig.176	S D1108出土遺物実測図(54)	208
Fig.177	S D1108出土遺物実測図(55)	209
Fig.178	S D1108出土遺物実測図(56)	210
Fig.179	S D1108出土遺物実測図(57)	211
Fig.180	S D1108出土遺物実測図(58)	212
Fig.181	S D1108出土遺物実測図(59)	213
Fig.182	S D1108出土遺物実測図(60)	214
Fig.183	S D1108出土遺物実測図(61)	215
Fig.184	S D1108出土遺物実測図(62)	216
Fig.185	S D1108出土遺物実測図(63)	217

Fig.186	S D1108出土遺物実測図(64)	218
Fig.187	S D1108出土遺物実測図(65)	219
Fig.188	S D1108出土遺物実測図(66)	220
Fig.189	S D1108出土遺物実測図(67)	221
Fig.190	S A1312平面図・断面図	222
Fig.191	S A1312出土遺物実測図(1)	223
Fig.192	S A1312出土遺物実測図(2)	224
Fig.193	S A1313平面図・断面図	225
Fig.194	S A1313平面プラン変遷図	226
Fig.195	S A1313出土遺物実測図	227
Fig.196	S A1114平面図・断面図	228
Fig.197	S A1114出土遺物実測図	229
Fig.198	S A1115平面図・断面図	230
Fig.199	S A2216平面図・断面図	232
Fig.200	S A2216平面プラン変遷図	233
Fig.201	S A2216炉平面図・断面図	233
Fig.202	S A2216土器平面分布図	234
Fig.203	S A2216遺物出土状況図(1)	235
Fig.204	S A2216遺物出土状況図(2)	236
Fig.205	S A2216遺物出土状況図(3)	236
Fig.206	S A2216出土遺物実測図(1)	237
Fig.207	S A2216出土遺物実測図(2)	238
Fig.208	S A2216出土遺物実測図(3)	239
Fig.209	S A2216出土遺物実測図(4)	240
Fig.210	S A2217平面図・断面図	242
Fig.211	S P2281遺物出土状況図	243
Fig.212	S A2217出土遺物実測図(1)	244
Fig.213	S A2217出土遺物実測図(2)	245
Fig.214	S A2218平面図・断面図	247
Fig.215	S A2218主柱穴配置変遷図	248
Fig.216	S A2218炉平面図・断面図	248
Fig.217	S D2253平面図・断面図	249
Fig.218	S A2218壁内外でのS D2253のずれ	249
Fig.219	S A2218壁面下部の変色帯	250
Fig.220	S A2218遺物出土状況図	251
Fig.221	S A2218出土遺物実測図(1)	252
Fig.222	S A2218出土遺物実測図(2)	253
Fig.223	S A2218出土遺物実測図(3)	254

Fig. 224 S A 2218出土遺物実測図(4)	255
Fig. 225 S A 2219平面図・断面図	257
Fig. 226 S P 2284遺物出土状況図	258
Fig. 227 S A 2219炉平面図	258
Fig. 228 S K 2282細礫分布範囲の変遷図	259
Fig. 229 S K 2283平面図・断面図	259
Fig. 230 S D 2254とS A 2216~2218の切りい関係図	260
Fig. 231 S D 2254遺物出土状況図	261
Fig. 232 S A 2219出土遺物実測図(1)	263
Fig. 233 S A 2219出土遺物実測図(2)	264
Fig. 234 S D 2254出土遺物実測図(1)	266
Fig. 235 S D 2254出土遺物実測図(2)	267
Fig. 236 S D 2254出土遺物実測図(3)	268
Fig. 237 S D 2254出土遺物実測図(4)	269
Fig. 238 S D 2254出土遺物実測図(5)	270
Fig. 239 S A 2220平面図・断面図	272
Fig. 240 S A 2220遺物出土状況図	273
Fig. 241 S A 2220出土遺物実測図	274
Fig. 242 S A 2221平面図・断面図	275
Fig. 243 S A 2221出土遺物実測図	276
Fig. 244 S A 2222平面図・断面図	277
Fig. 245 S A 2222出土遺物実測図	277
Fig. 246 S A 2223平面図・断面図	278
Fig. 247 S A 2223出土遺物実測図	279
Fig. 248 S A 2224平面図・断面図	279
Fig. 249 S A 2224出土遺物実測図	280
Fig. 250 S A 2125平面図・断面図	281
Fig. 251 S A 2125出土遺物実測図	282
Fig. 252 S A 2326平面図・断面図	282
Fig. 253 S A 2326出土遺物実測図	283
Fig. 254 S A 1127平面図・断面図	284
Fig. 255 S A 1127竈平面図・断面図	285
Fig. 256 S P 1186柱根実測図	285
Fig. 257 S A 1127出土遺物実測図	286
Fig. 258 S B 2228平面図・断面図	287
Fig. 259 S B 2229平面図・断面図	288
Fig. 260 S P 2287出土遺物実測図	288
Fig. 261 S B 2330平面図・断面図	289

Fig. 262	S B2331・2332平面図・断面図	290
Fig. 263	S X1269～1274平面図・断面図	291
Fig. 264	S X1273炭化物分布状況図	292
Fig. 265	S X1233平面図・断面図	293
Fig. 266	S X1233出土遺物実測図	294
Fig. 267	S X1334平面図・断面見通図	295
Fig. 268	S X1334出土遺物実測図	296
Fig. 269	S X2235平面図・断面見通図	297
Fig. 270	S X2235出土遺物実測図	298
Fig. 271	S X2236平面図・断面図	299
Fig. 272	S X2236出土遺物実測図	300
Fig. 273	S X2237平面図・断面図	300
Fig. 274	S X2237出土遺物実測図	301
Fig. 275	S E2339平面図・断面図	302
Fig. 276	S E2339出土遺物実測図(1)	303
Fig. 277	S E2339出土遺物実測図(2)	304
Fig. 278	S E1140平面図・断面見通図	305
Fig. 279	S E1140出土遺物実測図	306
Fig. 280	S K1143平面図・断面見通図	307
Fig. 281	S K1143出土遺物実測図(1)	308
Fig. 282	S K1143出土遺物実測図(2)	309
Fig. 283	S K1143出土遺物実測図(3)	310
Fig. 284	S K2244・2245平面図・断面図	312
Fig. 285	S K2244出土遺物実測図	313
Fig. 286	S K2245出土遺物実測図	314
Fig. 287	S K2246平面図・断面図	315
Fig. 288	S K2246出土遺物実測図	316
Fig. 289	S K2247平面図・断面図	317
Fig. 290	S K2247出土遺物実測図	318
Fig. 291	S K2248平面図・断面図	319
Fig. 292	S K2248出土遺物実測図	320
Fig. 293	S K2249平面図・断面図	320
Fig. 294	S K2249出土遺物実測図	321
Fig. 295	S K2350平面図・断面図	322
Fig. 296	S K2351平面図・断面図	323
Fig. 297	S K2351出土遺物実測図	324
Fig. 298	S K2252平面図・断面見通図	324
Fig. 299	S K2252出土遺物実測図	325

Fig.300	S D2255平面図・断面図	325
Fig.301	S D2255出土遺物実測図	326
Fig.302	S D2256平面図・断面図	326
Fig.303	S D2256出土遺物実測図	327
Fig.304	N R2210平面図	327
Fig.305	N R2210出土遺物実測図	328
Fig.306	N R2111平面図	328
Fig.307	S E1341平面図・断面見通図	330
Fig.308	S E1341井側隅柱構造模式図	331
Fig.309	S E2142平面図・断面見通図	332
Fig.310	銅鐸出土地点付近の遺構配置図と層序	337
Fig.311	銅鐸出土地点平面図・断面図	338
Fig.312	銅鐸埋納坑 S X1101平面図・断面図	339
Fig.313	S X1101周辺出土遺物実測図(1)	341
Fig.314	S X1101周辺出土遺物実測図(2)	342
Fig.315	銅鐸実測図(A面)	344
Fig.316	銅鐸実測図(B面)	345
Fig.317	銅鐸実測図(断面・側面)	346
Fig.318	銅鐸実測図(舞頂・鐸身内部)	347
Fig.319	鉤掛けと補修	348
Fig.320	A面の補刻	348
Fig.321	銅鐸拓影(A面)	350
Fig.322	銅鐸拓影(B面)	351
Fig.323	銅鐸拓影(A面／内面)	352
Fig.324	銅鐸拓影(B面／内面)	353
Fig.325	銅鐸拓影(舞頂・舞内面)	354
Fig.326	銅鐸表面状況図	356
Fig.327	石津川流域の弥生時代の遺跡および銅鐸出土地位置図	362

第II部 分析篇

Fig.328	銅鐸埋納地層断面における銅鐸成分の分布	377
Fig.329	Cuの分布に関する概念図	378
Fig.330	花粉ダイアグラム	383
Fig.331	試料採取地点	385
Fig.332	花粉ダイアグラム(1)	386
Fig.333	花粉ダイアグラム(2)	387

Fig.334 S D1108の珪藻ダイアグラム	388
Fig.335 S D1108の珪藻総合ダイアグラム	389
Fig.336 土器のX線回折チャート(1)	398
Fig.337 土器のX線回折チャート(2)	399
Fig.338 土器のX線マイクロアナライザ分析チャート(1)	399
Fig.339 土器のX線マイクロアナライザ分析チャート(2)	400
Fig.340 土器のX線マイクロアナライザ分析チャート(3)	401
Fig.341 水抽出物X線回折分析結果(1)	401
Fig.342 水抽出物X線回折分析結果(2)	402
Fig.343 兵庫県南部地震で西宮浜に生じた噴砂	416
Fig.344 Fig.343で採取した試料の粒径加積曲線	416
Fig.345 液状化現象と噴砂発生のメカニズム	416
Fig.346 砂脈aの平面図	417
Fig.347 砂脈bと液状化跡の断面図	417
Fig.348 砂脈cと液状化跡の断面図	418
Fig.349 砂脈cに関する粒径加積曲線	418
Fig.350 砂脈dと液状化跡の断面図	419
Fig.351 砂脈cの平面図	419
Fig.352 砂脈dの平面図	420
Fig.353 砂脈cの先端部の断面図	420
Fig.354 砂脈dの先端部の断面図	420
Fig.355 砂脈a～dの遺跡内での位置	421
Fig.356 南海地震と東海地震の発生時期	421
Fig.357 過去2000年間の地磁気永年変化曲線	424
Fig.358 各遺構の残留磁化方向の等面積投影図	426
Fig.359 地磁気永年変化曲線と測定結果	427

第III部 考察篇

Fig.360 身高・舞長径・底長径	435
Fig.361 舞長径に対する身高・底長径比	436
Fig.362 筒形度の分布	437
Fig.363 筒形度と身高	438
Fig.364 鍔高に対する鍔幅	440
Fig.365 鍔高に対する隆起帶高	440
Fig.366 鍔幅に対する隆起帶外側	441
Fig.367 隆起帶厚	441

Fig.368 鈕幅と隆起帯厚	442
Fig.369 鈕高に対する鈕幅	442
Fig.370 鈕高に対する隆起帯高	443
Fig.371 鈕幅に対する隆起帯外側	443
Fig.372 隆起帯厚	444
Fig.373 横帯幅と身高	446
Fig.374 中横帯幅と斜線条數	446
Fig.375 中縦帯幅と中横帯幅の差	447
Fig.376 鏑齒文帯幅	448
Fig.377 身高と鎧齒文帯幅・横帯幅	448
Fig.378 鏑齒文帯内三角形底辺長	450
Fig.379 鎧齒文帯長と三角形数	450
Fig.380 梗厚	451
Fig.381 底長に対する鰐幅	452
Fig.382 鰐下幅と鎧齒文内三角形数	453
Fig.383 内凸帯厚	454
Fig.384 身高に対する内凸帯厚・肩厚・梗厚	454
Fig.385 身高と内凸帯位置	454
Fig.386 身高に対する内凸帯位置	455
Fig.387 素文部の位置	455
Fig.388 身高に対する梗上素文部	456
Fig.389 身高と梗上素文部	457
Fig.390 四区画袈裟襷文銅鐸集成(1)	471
Fig.391 四区画袈裟襷文銅鐸集成(2)	472
Fig.392 四区画袈裟襷文銅鐸集成(3)	473
Fig.393 四区画袈裟襷文銅鐸集成(4)	474
Fig.394 四区画袈裟襷文銅鐸集成(5)	475
Fig.395 四区画袈裟襷文銅鐸集成(6)	476
Fig.396 四区画袈裟襷文銅鐸集成(7)	477
Fig.397 四区画袈裟襷文銅鐸集成(8)	478
Fig.398 四区画袈裟襷文銅鐸集成(9)	479
Fig.399 四区画袈裟襷文銅鐸集成(10)	480
Fig.400 北魏の鎧甲	482
Fig.401 隋唐の襦褶衫	483
Fig.402 威儀具(塵尾)類例	488
Fig.403 団扇類例	490
Fig.404 酒泉十六国墓壁画と現代の払子	491
Fig.405 計測部位概略図	494

Fig.406 「四方転びの箱」の主な報告例	496
Fig.407 木取りと組み上げの復元	498
Fig.408 「箱」の主な報告例	499
Fig.409 諸属性と系譜	506
Fig.410 製塙土器の分類(1)	509
Fig.411 製塙土器の分類(2)	510
Fig.412 大阪湾岸における製塙土器編年案	512
Fig.413 弥生時代後期後半から古墳時代前期における製塙土器出土遺跡	515
Fig.414 土器分類図(1)	526
Fig.415 土器分類図(2)	527
Fig.416 土器分類図(3)	528
Fig.417 土器分類図(4)	529
Fig.418 壺口縁の分類	531
Fig.419 底部形態の分類	536
Fig.420 積穴住居S A2216～2219・溝S D2254の切合い関係	539
Fig.421 土器移動の基本概念モデル	540
Fig.422 様相5における有棱高杯の法量分布	545
Fig.423 諸様相における有棱高杯Aの法量分布	546
Fig.424 下田遺跡出土土器の変遷(1)	550
Fig.425 下田遺跡出土土器の変遷(2)	551
Fig.426 下田遺跡出土土器の変遷(3)	552
Fig.427 下田遺跡出土土器の変遷(4)	553
Fig.428 下田遺跡出土土器の変遷(5)	554
Fig.429 下田遺跡出土土器の変遷(6)	555
Fig.430 下田遺跡出土土器の変遷(7)	556
Fig.431 下田遺跡出土土器の変遷(8)	557
Fig.432 下田遺跡出土土器の変遷(9)	558
Fig.433 下田遺跡出土土器の変遷(10)	559
Fig.434 下田遺跡出土土器の変遷(11)	560
Fig.435 弥生形壺Aの器高・最大径	563
Fig.436 弥生形壺Aの器高・口径	563
Fig.437 鉢形底部の擬口縁高・径	565
Fig.438 弥生形壺Aa～Aeの外形線	565
Fig.439 和泉地域の弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の主要遺跡分布	575
Fig.440 下田I～III式編年試案(1)	578
Fig.441 下田I～III式編年試案(2)	579
Fig.442 下田I～III式編年試案(3)	580
Fig.443 下田I～III式編年試案(4)	581

Fig.444 下田 I～III式編年試案(5)	582
Fig.445 下田 I～III式編年試案(6)	583
Fig.446 下田 I～III式編年試案(7)	584
Fig.447 下田 I～III式編年試案(8)	585
Fig.448 下田 I～III式編年試案(9)	586
Fig.449 下田 I～III式編年試案(10)	587
Fig.450 下田 I～III式編年試案(11)	588
Fig.451 上町遺跡「井戸」状遺構出土土器実測図	602
Fig.452 直口壺の法量分布	612
Fig.453 直口壺口縁部の比較	612
Fig.454 小形丸底土器の法量分布	618
Fig.455 下田 I～III式有稜高杯Aの法量分布	621
Fig.456 小若江北遺跡出土土器実測図	627
Fig.457 下田III式以降の主要器種変遷(1)	630
Fig.458 下田III式以降の主要器種変遷(2)	631
Fig.459 下田III式・平城宮下層S Dの小形丸底土器法量分布	634
Fig.460 下田III式・平城宮下層S D出土土器の組成比較	636
Fig.461 大阪府下(淀川以南)の古墳時代初頭～前期前半の遺跡分布	642
Fig.462 四ヶ池・池上曾根遺跡周辺の集落分布	646

付 図 目 次

- 付図1 A-1区遺構配置図
- 付図2 A-2区遺構配置図
- 付図3 A-3区遺構配置図
- 付図4 B-2区遺構配置図
- 付図5 B-1・3区遺構配置図
- 付図6 下田 I～III式編年試案(壺)
- 付図7 下田 I～III式編年試案(甕)
- 付図8 下田 I～III式編年試案(高杯)
- 付図9 下田 I～III式編年試案(鉢)
- 付図10 下田 I～III式編年試案(器台)
- 付図11 下田 I～III式編年試案(小形丸底土器その他)

表 目 次

第Ⅰ部 本文篇

Tab. 1 新旧遺構番号・略号対照表	6
Tab. 2 下田遺跡周辺遺跡名	11
Tab. 3 銅鐸計測表	358
Tab. 4 石津川流域の弥生時代主要遺跡一覧表	361
Tab. 5 堺市出土銅鐸一覧表	363

第Ⅱ部 分析篇

Tab. 6 銅鐸の化学組成	372
Tab. 7 下田遺跡地下水の水質	372
Tab. 8 粒度組成測定結果	373
Tab. 9 埋積環境と電気伝導度およびpHの関係	373
Tab. 10 銅鐸周辺の砂の透水係数測定結果	374
Tab. 11 銅鐸周辺の砂のX線回折分析結果	374
Tab. 12 銅鐸周辺の砂の主要化学成分	375
Tab. 13 砂試料中の銅鐸成分含有量	376
Tab. 14 地層中における銅製品の平均腐食速度	379
Tab. 15 検出花粉化石一覧表	384
Tab. 16 各地点の花粉帯と年代	390
Tab. 17 種子同定結果	394
Tab. 18 水抽出物分析結果	401
Tab. 19 土器の表面に見られる砂礫	404
Tab. 20 土器の器形と類型	409
Tab. 21 堺市内の砂礫	410
Tab. 22 残留磁気測定結果	425
Tab. 23 考古地磁気測定結果	425
Tab. 24 考古地磁気年代推定結果	428

第Ⅲ部 考察篇

Tab. 25 四区画袈裟襷文銅鐸の分類	438
----------------------------	-----

Tab. 26	桜ヶ丘13・14号鐸	444
Tab. 27	鋸歯文蒂長と三角形底辺数	449
Tab. 28	飾耳	458
Tab. 29	四区画袈裟縞文銅鐸各類の特徴	459
Tab. 30	下田鐸と野々間2号鐸	462
Tab. 31	旧国別出土銅鐸一覧	464
Tab. 32	四区画袈裟縞文銅鐸複数出土地点	464
Tab. 33	単数出土と共伴銅鐸	465
Tab. 34	四区画袈裟縞文銅鐸要素一覧	470
Tab. 35	日本出土木甲一覧表	484
Tab. 36	主な「四方転びの箱」の復元計測値	494
Tab. 37	主な「四方転びの箱」の形態分類	495
Tab. 38	製塙土器出土遺跡	516
Tab. 39	下田遺跡土器様相と各時代区分の対応関係	524
Tab. 40	S D1108(3層)出土土器点数	568
Tab. 41	様式区分と土器様相の対応関係	577
Tab. 42	下田II-3式資料群における甕の組成	609
Tab. 43	下田I～III式有縁高杯Aの各比率	621
Tab. 44	布留式土器編年対照表	622
Tab. 45	布留式における下田III式の相対的位置	638
Tab. 46	和泉地域の庄内式甕出土遺跡	650

写 真 目 次

第II部 分析篇

写真 1	出土時の銅鐸	381
写真 2	銅鐸埋納地層断面における砂試料採取位置	381
写真 3	銅鐸に接触していた砂のCu濃度の分布	381
写真 4	下田遺跡出土種子	395
写真 5	野島断層による崖の食い違い	415
写真 6	兵庫県南部地震で生じた噴砂	415
写真 7	砂脈bと液状化跡の断面形	417
写真 8	砂脈cと液状化跡の断面形(遠景)	418
写真 9	砂脈cと液状化跡の断面形(近景)	418
写真 10	砂脈dと液状化跡の断面形	419
写真 11	砂脈cの平面形	419
写真 12	砂脈dの平面形	420

図版目次

第I部 本文篇

- 卷頭図版 1 下田遺跡遠景
卷頭図版 2 銅鐸(A面)
卷頭図版 3 銅鐸(B面)
卷頭図版 4 銅鐸表面の経時変化

- 卷頭図版 5 銅鐸内部充填土のX線CT画像
卷頭図版 6 S D1108出土土器群
卷頭図版 7 S D1108出土木器
卷頭図版 8 S D1108出土木器

第IV部 図版篇

- PL. 1 河道 N R1302
PL. 2 河道 N R1303
PL. 3 河道 N R1104
PL. 4 河道 N R1207
PL. 5 河道 N R2109
PL. 6 大溝 S D1305(弥生時代中期)
PL. 7 大溝 S D1305(古墳時代初頭)
PL. 8 土器溜 SW1159
PL. 9 土器溜 SW1360~1366
PL. 10 大溝 S D2206
PL. 11 大溝 S D1108
PL. 12 大溝 S D1108
PL. 13 大溝 S D1108
PL. 14 大溝 S D1108
PL. 15 大溝 S D1108
PL. 16 大溝 S D1108
PL. 17 壺穴住居 S A1312
PL. 18 壺穴住居 S A1313
PL. 19 壺穴住居 S A1114・S A1115
PL. 20 壺穴住居 S A1114・S A1115
PL. 21 壺穴住居 S A2216~2219
PL. 22 壺穴住居 S A2216
PL. 23 壺穴住居 S A2216
PL. 24 壺穴住居 S A2217
PL. 25 壺穴住居 S A2218
- PL. 26 壺穴住居 S A2219
PL. 27 排水溝 S D2254
PL. 28 排水溝 S D2254
PL. 29 壺穴住居 S A2220
PL. 30 壺穴住居 S A2221~2224
PL. 31 壺穴住居 S A2125・S A2326
PL. 32 壺穴住居 S A1127
PL. 33 捃立柱建物 S B2228・2229・2330~2332
PL. 34 水田遺構 S X1269~1274
PL. 35 土器棺墓 S X1233
PL. 36 土器棺墓 S X1334・S X2235
PL. 37 土器棺墓 S X2237
PL. 38 井戸 S E2339・S E1140
PL. 39 土坑 S K1143
PL. 40 土坑 S K2244・S K2245
PL. 41 土坑 S K2246・S K2247
PL. 42 土坑 S K2248・S K2249
PL. 43 土坑 S K2350・S K2351・S K2252
PL. 44 溝 S D2255・S D2256
PL. 45 河道 N R2210・N R2111
PL. 46 井戸 S E1341・S E2142
PL. 47 銅鐸埋納坑 S X1101(検出直後)
PL. 48 銅鐸埋納坑 S X1101
PL. 49 銅鐸埋納坑 S X1101
PL. 50 銅鐸埋納坑 S X1101

PL. 51	銅鐸埋納坑	S X1101(銅鐸取上後)	PL. 89	S D1305(4層)	出土遺物
PL. 52	銅鐸(A面)		PL. 90	S D1305(4層)	出土遺物
PL. 53	銅鐸(B面)		PL. 91	S D1305(4層)	出土遺物
PL. 54	銅鐸(側面)		PL. 92	S D1305(4層)	出土遺物
PL. 55	銅鐸(上面・下面)		PL. 93	S D1305(1~3層)	出土遺物
PL. 56	銅鐸紐		PL. 94	S D1305(1~3層)	出土遺物
PL. 57	銅鐸細部(A面)		PL. 95	SW1159	出土遺物
PL. 58	銅鐸細部(B面)		PL. 96	SW1159	出土遺物
PL. 59	銅鐸補修痕		PL. 97	SW1360・SW1362	出土遺物
PL. 60	銅鐸X線寫真		PL. 98	SW1363	出土遺物
PL. 61	N R1302	出土遺物	PL. 99	SW1363	出土遺物
PL. 62	N R1104	出土遺物	PL. 100	SW1364	出土遺物
PL. 63	N R1104	出土遺物	PL. 101	SW1364	出土遺物
PL. 64	N R1104	出土遺物	PL. 102	SW1365	出土遺物
PL. 65	N R1104	出土遺物	PL. 103	S D2206(3層)	出土遺物
PL. 66	SW1157	出土遺物	PL. 104	S D2206(2層)	出土遺物
PL. 67	SW1157	出土遺物	PL. 105	S D2206(2層)	出土遺物
PL. 68	SW1157	出土遺物	PL. 106	S D2206(1層)	出土遺物
PL. 69	SW1157	出土遺物	PL. 107	S A2216	出土遺物
PL. 70	SW1157	出土遺物	PL. 108	S A2216	出土遺物
PL. 71	SW1158	出土遺物	PL. 109	S A2216	出土遺物
PL. 72	N R2109	出土遺物	PL. 110	S A2218	出土遺物
PL. 73	N R2109	出土遺物	PL. 111	S A2217・S A2219	出土遺物
PL. 74	N R2109	出土遺物	PL. 112	S D2254	出土遺物
PL. 75	S D1305(6・7層)	出土遺物	PL. 113	S D2254	出土遺物
PL. 76	S D1305(6・7層)	出土遺物	PL. 114	S D2254	出土遺物
PL. 77	S D1305(5層)	出土遺物	PL. 115	S D2254	出土遺物
PL. 78	S D1305(5層)	出土遺物	PL. 116	S A2220	出土遺物
PL. 79	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 117	S A2224・S A1127・S B2229	出土遺物
PL. 80	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 118	S X1233・S X1334	出土遺物
PL. 81	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 119	S X2235~2237	出土遺物
PL. 82	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 120	S E2339	出土遺物
PL. 83	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 121	S E1140	出土遺物
PL. 84	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 122	S K2244・S K2245	出土遺物
PL. 85	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 123	S K2246	出土遺物
PL. 86	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 124	S K2247・S K2351	出土遺物
PL. 87	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 125	S K2248・S K2249	出土遺物
PL. 88	S D1305(4層)	出土遺物	PL. 126	S D1108	出土遺物

PL.127	S D1108	出土遺物	PL.153	S D1108	出土遺物
PL.128	S D1108	出土遺物	PL.154	S D1108	出土遺物
PL.129	S D1108	出土遺物	PL.155	S D1108	出土遺物
PL.130	S D1108	出土遺物	PL.156	S D1108	出土遺物
PL.131	S D1108	出土遺物	PL.157	S D1108	出土遺物
PL.132	S D1108	出土遺物	PL.158	S D1108	出土遺物
PL.133	S D1108	出土遺物	PL.159	S D1108	出土遺物
PL.134	S D1108	出土遺物	PL.160	S D1108	出土遺物
PL.135	S D1108	出土遺物	PL.161	S D1108	出土遺物
PL.136	S D1108	出土遺物	PL.162	S D1108	出土遺物
PL.137	S D1108	出土遺物	PL.163	S D1108	出土遺物
PL.138	S D1108	出土遺物	PL.164	S D1108	出土遺物
PL.139	S D1108	出土遺物	PL.165	S D1108	出土遺物
PL.140	S D1108	出土遺物	PL.166	S D1108	出土遺物
PL.141	S D1108	出土遺物	PL.167	S D1108	出土遺物
PL.142	S D1108	出土遺物	PL.168	S D1108	出土遺物
PL.143	S D1108	出土遺物	PL.169	S D1108	出土遺物
PL.144	S D1108	出土遺物	PL.170	S D1108	出土遺物
PL.145	S D1108	出土遺物	PL.171	S D1108	出土遺物
PL.146	S D1108	出土遺物	PL.172	S D1108	出土遺物
PL.147	S D1108	出土遺物	PL.173	S D1108	出土遺物
PL.148	S D1108	出土遺物	PL.174	S D1108	出土遺物
PL.149	S D1108	出土遺物	PL.175	S D1108	出土遺物
PL.150	S D1108	出土遺物	PL.176	S D1108	出土遺物
PL.151	S D1108	出土遺物	PL.177	S D1108	出土遺物
PL.152	S D1108	出土遺物	PL.178	S D1108	出土遺物

第Ⅰ部

本文篇

第1章 経緯と方法

第1節 調査経緯

下田遺跡は大阪府堺市下田町に所在する繩紋時代～中世の遺跡で、JR阪和線をまたいで鳳・津久野両駅のほぼ中に位置している。下田遺跡は堺市教育委員会の試掘調査で発見され周知の遺跡となった。下田町地内の周辺地域では、既に堺市教育委員会による試掘・発掘調査、下田遺跡調査団による発掘調査が行われ、多大な成果が得られている。

このたび、1997年度に実施が計画されている第52回国民体育大会「なみはや国体」の動脈、いわゆる「国体道路」としての役割を担わされ、建設途上にある都市計画道路常盤浜寺線の延伸が具体化する運びとなった。道路建設予定地内には下田遺跡の存在が周知されており、大阪府鳳土木事務所と大阪府教育委員会文化財保護課との間で協議の場がもたれた。その結果、(財)大阪府埋蔵文化財協会が試掘調査の業務を委託され、1993年2月8日より3月9日まで現地における試掘調査を実施した。調査はJR線の南東区域(後にB区と呼称)についてトレンチを設定して行われ、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居、時期不明の流路、さらに弥生時代後期～中近世までの幅広い時代にわたる遺物が検出された。JR線の北西区域(後にA区と呼称)では、華々しい成果の挙げられた下田遺跡調査団による過去の調査地点と近接するため、あえて試掘調査は実施されなかった。

試掘調査の結果を承けた大阪府教育委員会文化財保護課は、事前の発掘調査が必要との判断を下し、大阪府鳳土木事務所と再度協議が重ねられた。調査区の範囲については、既往の調査結果と、府教委による周辺区域の試掘調査成果を踏まえて決定された。以上により(財)大阪府埋蔵文化財協会は、大阪府鳳土木事務所との間に「下田遺跡」委託契約を締結し、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもと、発掘調査に臨むこととなった。

現地における発掘調査は、1993年5月11日に開始され1994年3月25日に終了した。調査は比較的順調に進捗したが、調査中に未買収地の紛争解決によって新たに取得され、調査区域に追加された用地もあり、当初の計画通りに全ての調査を終了させることは不可能な状況となった。このため道路建設工事との関連から、B区については優先的に全ての調査を完了させ、残るA区は一部調査予定地を分離し次年度に改めて調査する方針が立てられ、一旦調査を終了した。これら1次調査の調査面積は、最終的に約6500m²となった。

調査保留となったA区の残地の処理につき、2次調査として「下田遺跡(その2)」の委託契約が、前年度に引き続き大阪府鳳土木事務所との間で取り交わされた。2次調査の調査面積は約1500m²で、現地における調査を1994年6月13日に開始、同年10月31日に終了した。最終的な全区域の調査面積は、1次・2次を合計した約8000m²である。

調査終了後は直ちに整理作業が開始されたが、大阪府の方針により調査主体である(財)大阪府埋蔵文化財協会は1995年3月31日をもって解体、同年4月1日付けで旧協会組織はそのまま(財)大阪文化財センターに併合され、同時に組織名を(財)大阪府文化財調査研究センターと改称した新組織が発足した。これらの経緯の中で、下田遺跡の整理作業は新組織において続行され、1996年12月25日の本報告書刊行をもって事業が終了した。

第2節 調査の方法

(時)大阪府埋蔵文化財協会では調査方法の細則を定めた「発掘調査規程」(以下、「規程」とする)が作成されており、下田遺跡の調査でもこれに準拠して各種記録作業を実施した。地区割は以下に示す協会独自の方法によった(Fig. 1)。

遺跡の位置は国土調査法に基づく新平面直角座標の第VI座標系を使用して表示される。地区割は大阪府発行新版、1/2500地形図(昭和59年建設省国土地理院承認)を基本としている。この地形図の基本となる図郭割は、府下全域を南北に6000mずつA～Oに、また東西に8000mずつ0～8に分割したもので、このうちの1区画は列・行の順に、例えば「大E-4」と呼称する。1/2500地形図には、この大区画の内部を16等分した東西2000m、南北1500mの範囲が記されており、それぞれ1～16までの番号が付与されている。下田遺跡はこの地形図の「大E-4-16」図郭内に位置する。

遺跡の地区割の方法は、まずこの図郭の内部を500m×500mの方形区画によって12等分し、それぞれA～Lの記号を付ける。次にこの500m四方の区画を25等分して100m四方の区画を作る。これには01～25の2桁の数字を付与する。この方法で下田遺跡調査区の位置は「大E-4-16-C-06・11～13(一部は18にかかる)」という記号によって表示される。

さらにこの100m四方の区画を、4m×4mの小区画によって625等分する。この区画には北及び西から順にA～Yまでアルファベットを与え、区画の位置は行・列の順に2文字のアルファベットを使用して表示する。この面積16m²の区画が「規程」で定めた地区的最小単位となる。区画の名称を正式に表記すれば、例えば銅鐸出土地点は「大E-4-16-C-12-F E」となるが、これでは煩瑣に過ぎるため、通常の場合は前半を省略して「C12F E」のように、最終5桁の英数字を連続させて表現する取り決めとなっている。

現地調査では上記地区割以外に、JR線を境に北西側をA区、南東側をB区と独自に呼び分けた。またA・B両区内部は、里道や水路などで分断されており、分割された小調査区をA-1・2区、B-1～3区とした(本文篇第3章第2節参照)。

包含層の掘削にあたっては、調査区内にある新旧の旧耕土層は機械掘削によって除去し、これより以下の包含層は遺構面まで人力掘削を行った。遺物は認識された層ごとに、「規程」により定める4m方眼の最小単位区画を基本に回収した。遺構面は1～2面が確認され、精査により遺構を検出して掘削を行った。竪穴住居をはじめ溝、土坑などは認識される土層ごと、あるいは任意に分層発掘を行った。特に竪穴住居では上・中・下、あるいは上・下の3～2層に分別して遺物の回収に努めた。從って下層からの出土遺物は、住居床面遺物あるいは廃絶時期に近い時期を示す遺物の可能性が高い。また主要な土坑、溝は上下2層、あるいはそれ以上に分割して遺物を取り上げたものが多い。

なお現地においては原則的に「規程」に従い、遺構番号は検出順に連続する通し番号とし、また遺構の略号も協会独自のものが付与されている。しかし現地での呼称は「規程」に必ずしも忠実ではない場合があり、また整理途上の段階で協会の解体を迎えると共に「規程」の遵守義務が消滅した。このため、本文中に記載した遺構に限り、遺構名の再編成を行って新たな番号を付与し、また遺構の略号も変更した。その方法は凡例に記す通りである。

現地で作成した一切の記録には全て旧称が用いられており、将来的な便のために新旧の遺構番号・略号の対照表を作成した(Tab. 1)。

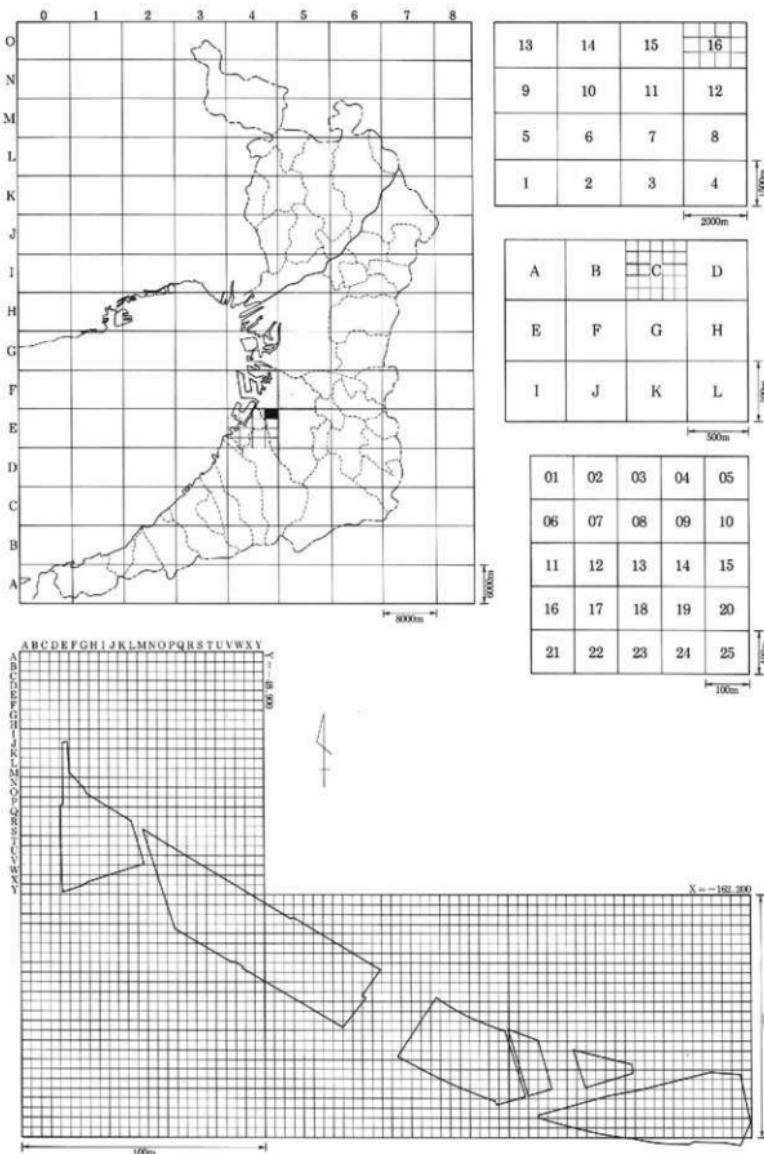


Fig. 1 地区割模式図

Tab. 1 新旧遺構番号・略号対照表

新	旧	調査コード	新	旧	調査コード
S X1101	—	93-10	S K2245	922-O O	93-10
N R1302	358-O R • 359-O R	94-05	S K2246	217-O S	93-10
N R1303	335-O R	94-05	S K2247	C-1区東端溝・216-00	92-01・93-10
N R1104	6-O R	93-10	S K2248	205-O X	93-10
S D1305	177-O X • 177-O S	93-10 • 94-05	S K2249	204-O X	93-10
S D2206	C-4区大溝・201-O X	92-01 • 93-10	S K2250	685-O D	93-10
N R1207	最終面河道・49-O R	93-10	S K2251	675-O O	93-10
S D1108	166-O R	93-10	S K2252	221-O P	93-10
N R2109	流路2・10-O R	92-01 • 93-10	S D2253	890-O S	93-10
N R2210	流路1・1-O R	92-01 • 93-10	S D2254	202-O S	93-10
N R2111	3-O R	93-10	S D2255	207-O S	93-10
S A1312	223-O D	94-05	S D2256	条里制溝	93-10
S A1313	222-O D	94-05	S W1157	6-O R東肩上器溜西	93-10
S A1114	107-O D	93-10	S W1158	6-O R東肩土器溜東	93-10
S A1115	143-O D	93-10	S W1159	177-O X	93-10
S A2216	203-O D	93-10	S W1360	177-O S土器溜A群	94-05
S A2217	800-O D	93-10	S W1361	177-O S土器溜A群	94-05
S A2218	801-O D	93-10	S W1362	177-O S土器溜A群	94-05
S A2219	802-O D	93-10	S W1363	177-O S土器溜B群	94-05
S A2220	C-3区住居・206-O D	92-01 • 93-10	S W1364	177-O S土器溜C群	94-05
S A2221	208-O X	93-10	S W1365	177-O S土器溜D群	94-05
S A2222	467-O D	93-10	S W1366	177-O S土器溜E群	94-05
S A2223	466-O D	93-10	S X1267	52-O F	93-10
S A2224	1075-O D	93-10	S X1268	53-O F	93-10
S A2125	1370-O D	93-10	S X1269	60-O Z	93-10
S A2326	612-O D	93-10	S X1270	61-O Z	93-10
S A1127	3-O D	93-10	S X1271	62-O Z	93-10
S B2228	—	93-10	S X1272	63-O Z	93-10
S B2229	845-O B	93-10	S X1273	水田追加	93-10
S B2330	692-O B	93-10	S X1274	水田追加	93-10
S B2331	650-O B	93-10	S P1375	345-O P	94-05
S B2332	641-O B	93-10	S P1376	347-O P	94-05
S X1233	59-O O	93-10	S P1377	338-O P	94-05
S X1334	220-O X	94-05	S P1378	339-O P	94-05
S X2235	435-O O	93-10	S P2279	1045-O P	93-10
S X2236	581-O O	93-10	S K2280	入口土坑	93-10
S X2237	254-O P	93-10	S P2281	975-O P	93-10
S K1338	348-O O	94-05	S K2282	入口土坑	93-10
S E2339	604-O W	93-10	S K2283	1170-O O	93-10
S E1140	4-O O	93-10	S P2284	986-O P	93-10
S E1341	200-O W	94-05	S K2185	1381-O O	93-10
S E2142	5-O W	94-05	S P1186	Pit-e	93-10
S K1143	189-O O	93-10	S P2287	847-O P	93-10
S K2244	925-O O	93-10			

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境(Fig. 2)

下田遺跡は、大阪府堺市の中城北西部にあたる下田町にあり、かつては和泉国の北部に位置した。和泉国は西に大阪湾を臨み、北は攝津国、東は河内国、南は紀伊国と国境を接する。地理的にみると和泉国は、和歌山県紀ノ川を貫く中央構造線に沿った内帯側即ち北側が、今なお続く造山活動によって隆起した和泉山脈を脊梁とし、その北西側に弧を描く大阪湾の汀線によって画された地域である。今に和泉あるいは泉州などと通称され、大阪府下でも独特の気風をもった地方として知られている。

さて和泉山脈は、和泉層群からなる三国山、葛城山などの主峰を擁した葛城山脈と、その前面に形成された領家花崗岩類、泉南流紋岩類などからなる前衛山地で構成されている。これら基盤山地の前面には、大阪層群を主体とした丘陵地帯が展開し、さらにその前縁には、河成砂礫を主とした段丘堆積物で構成された段丘群が広がりをみせている。段丘堆積層には、大阪層群を不整合に覆う高位段丘堆積層と、その前面に河岸段丘、扇状地性段丘として分布する中位・低位段丘堆積層がある。これらの丘陵や段丘群は、基盤山地に源を発する大小の河川によって下刻され、樹枝状の幅広い谷筋を多数開析させている。和泉地域の河川は基盤山地の地塊運動の影響を受け、おしなべて流路が南東一北西方向に緩やかな弧を描くのが特徴で、谷筋も河川と同様の方向に下刻されたものが一般的である。因みに和泉地域の地方自治体は、一部を除き概ね南東から北西方向の細長い行政区画を有しているが、その理由はこうした地形上の制約によるところが大きい。またこれら複雑な谷地形を利用した谷池が隨所に造築されており、皿池と共に農業用水の確保に悩まされた和泉地域の水利を特徴づける景観を出現させている。さて段丘からさらに低地に到ると、河川沿いに氾濫原堆積層、沿岸部に海成の海岸平野が、帯状の沖積層として広範に分布する。海岸平野の縁辺に沿って形成された浜堤の背後には、低湿地帯である後背湿地が形成された地域も見受けられる。

次に、遺跡を中心とした周辺の地形に目を向けてみよう。下田遺跡は石津川下流域の左岸に立地する遺跡である。石津川は泉北丘陵鉢ヶ峰付近に発する河川で、蛇行を繰り返して北流し、陶器川、和田川、百済川などの支流を合して大阪湾に注ぐ。近年では河川改修によって流路の固定化、直線化が図られているが、周辺には小規模な三日月湖や流路痕跡が観察され、かつての流路の名残をとどめている。石津川によって分断された丘陵は、概ね河川を境に右岸が泉北丘陵、左岸が信太山丘陵と称されている。いずれも主体は大阪層群であるが、前面には前述のように段丘層が発達をみせており、右岸は泉北台地、左岸は信太山台地として低地部まで広がりをみせ、泉北台地の北端は上町台地に接続する。微地形的にみれば信太山丘陵の北端に張り出した低位段丘を三光台地と称し、ここに四ッ池遺跡が位置している。また石津川右岸の泉北台地末端の中位段丘を中心とした三国ヶ丘台地には、百舌鳥古墳群が広がりをみせる。下田遺跡はこれら大遺跡に囲まれるが如く、標高8m前後の石津川の氾濫平野上に占地する。石津川の下流域であり、その河口は北西方向約2500mの距離にある。

なお現況における調査地は、JR阪和線を跨いで鳳・津久野両駅のはば中間に位置し、東を石津川、北西を府道13号線、北東を工場に囲まれた田園地帯である。しかし近年では、住宅地、商業地として急速に開発が進められており、景観を大きく変容させつつある。

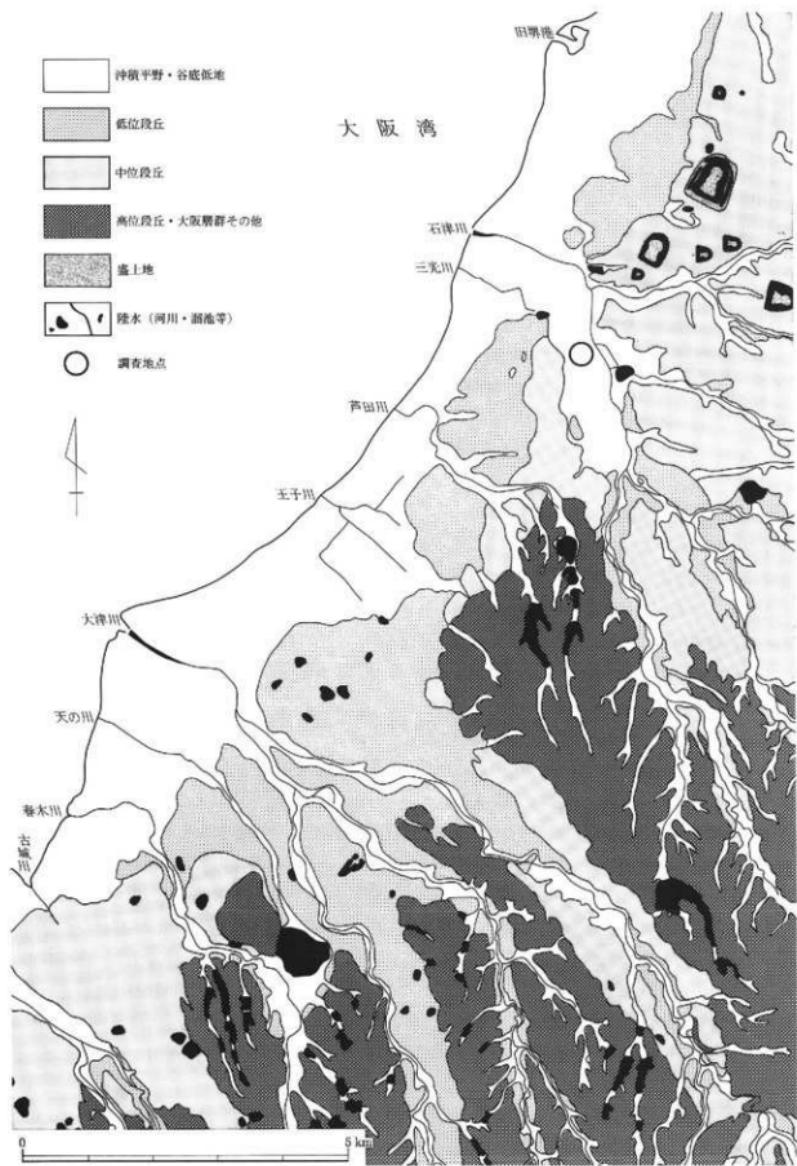


Fig. 2 遺跡周辺地質図

第2節 歴史的環境(Fig. 3)

下田遺跡の所在する石津川周辺には、歴史的に意義深い遺跡が数多く残されている。本節では石津川流域を中心に、和泉北部地域における原始～古代の歴史的環境について概観しておきたい。

和泉地域の旧石器時代及び縄文時代早期の遺物としては、石津川中下流域においては鈴の宮遺跡で国府型ナイフ形石器、有舌尖頭器の出土が知られ、また中流域の野々井遺跡ではルヴァロア型石核、有舌尖頭器などが採集されている。この時代の遺物を出土する遺跡は多くはない、またいずれも二次堆積の状況下での出土あるいは採集品であって、明確な遺構には伴わない。遺物は単発的に出土することが多いが、石津川より南の信太山丘陵に目を転じると、大園遺跡で石器製作遺構であるユニット、ブロックといった石器片の集中部が検出されている。

石津川周辺の主要な縄文時代遺跡として、河口付近の左岸に後・晩期の土器を出土した船尾西遺跡が立地する。また船尾西遺跡と至近距離にある四ッ池遺跡では、三光台地先端西側の通称「縄文台地」上において、後期中葉～晩期末の遺構、遺物が出土しており、船尾西遺跡との繼続性、連続性が指摘されている。石津川を遡上した右岸にある鈴の宮遺跡でも後・晩期の土器を出土し、また中流域の西浦橋遺跡では、中期末～晩期の土器が知られている。同じく中流域の小阪遺跡では、早期から晩期までの土器が、比較的よくまとまって出土している。

続く弥生時代の遺跡としては、まず著名な四ッ池遺跡を挙げねばなるまい。四ッ池遺跡は石津川左岸の三光台地の先端(北端)を中心として、その周辺の沖積平野まで広がる大遺跡である。集落は前期から形成が開始され、中期には規模を拡大し拠点的性格を有する集落として飛躍的発展を遂げた。台地上に大溝を掘削して集落を区画する環濠に供し、また台地の北側および東側の沖積平野には、方形周溝墓を中心とした墓域が営まれていた。中期と後期の間には、弥生社会の構造に何らかの変革のあったことが知られているが、当地域においても中期段階でこのように巨大化した四ッ池の集落も、後期に至って結合力の弛緩により小集団化すると共に、台地上から周辺の低地部へ分散が行われたようであるが、後期前半段階での四ッ池遺跡の周辺遺跡については、よく分かっていない。

前期の遺跡には他に鈴の宮遺跡、上遺跡などがある。四ッ池遺跡と上遺跡からは縄文晩期と弥生前期の土器の出土が知られる。鈴の宮遺跡は石津川と和田川合流点付近の右岸段丘上に位置し、四ッ池遺跡から石津川を遡した分村ともされ、前期後半に始まり中期には方形周溝墓が造営されている。中期に至って西浦橋遺跡では水田経営を目的とした井堰が構築されており、同時期の堅穴住居、掘立柱建物、方形周溝墓からなる集落が発見された菱木下遺跡との、密接な関連が指摘されている。万崎池遺跡では中期の遺物と共に後期の堅穴住居が検出された。毛穴遺跡は鈴の宮遺跡北側の右岸中位段丘縁に位置する中期の遺跡であるが、遺物は偶発的に出土したもので本格的な調査は行われていない。石津川とその支流和田川に挟まれた万崎遺跡からは磨製石剣等の出土を見る。後期には四ッ池遺跡をはじめ、集落規模の縮小化が一般的の傾向として認められるが、先にも触れたが当地域では後期前半の遺跡は稀薄で、当該期集落の動向は不明な点が多い。後期末の遺跡としては、下田遺跡の南方至近距離にある鶴田町遺跡がある。位置的にみて下田遺跡と密接な関係のあった集落と考えられる。

堺市の南西、和泉市と泉大津市にまたがる平野部には、弥生前期に営みが開始された池上曾根遺跡が立地する。遺跡は弥生時代の全期間を通じて経営されたが、中期に至り集落の周囲に大規模な環濠を巡らせた大集落へと発展を遂げた。さらに近年の調査で大規模な掘立柱建物遺構が発見されたことは記憶

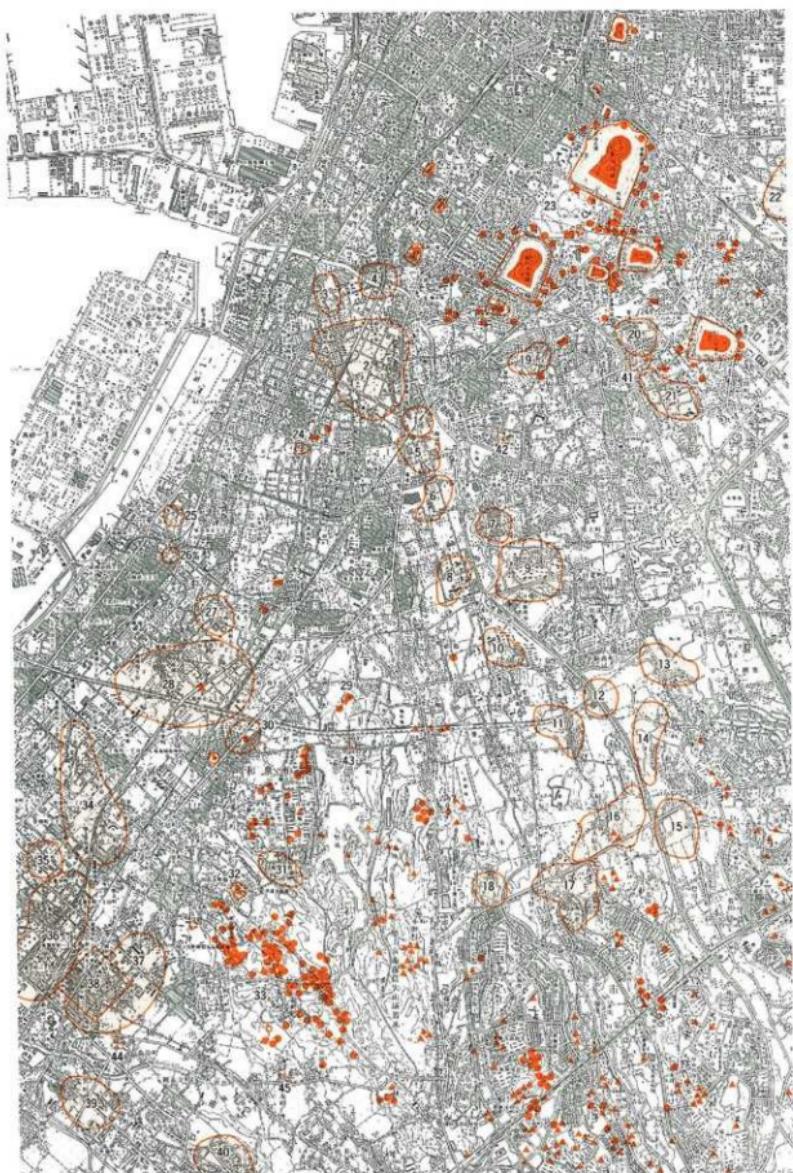


Fig. 3 調査地周辺遺跡分布図

に新しい。当時の政治社会に重要な役割を担った拠点集落であったと考えられており、その様子は四ヶ池遺跡の状況と相通じるものがある。石津川の南、信太山丘陵を越えた谷筋を流れる楓尾川・松尾川・牛滝川の3河川は、下流域で合流して大津川となり大阪湾に注ぐ。これら河川の周辺にも数々の遺跡が知られている。楓尾川流域の遺跡として、楓尾川・松尾川に挟まれた丘陵上先端に立地する観音寺山遺跡は、弥生時代中期～後期に営まれた大規模な高地性集落として知られている。¹⁹⁾ 遺跡からは二重の空濠を巡らせた100棟を超える堅穴住居が検出されている。また観音寺山遺跡の北方約1kmの信太山丘陵上には、やはり同様の性格をもつ懸ヶ池遺跡が営まれている。²⁰⁾ 特に懸ヶ池遺跡は立地環境や経営された時代などから、池上曾根遺跡との関連が指摘されている。

なお、堺市内ではこれまで4例の銅鐸の出土が知られる。四ヶ池遺跡西方の浜寺昭和町出土の扁平鉢式6区袈裟襷紋銅鐸、和田川上流の菱木出土の突線鉢式銅鐸、陶器北出土の外縁付鉢式横帶流水紋銅鐸、家原寺町から出土したと伝えられる銅鐸(詳細は不明)である。そして今回、下田遺跡で発見された扁平鉢式4区袈裟襷紋銅鐸が市内5番目の出土例となった。いずれも中下流の石津川周辺地域から出土した点で共通している。

弥生時代末～古墳時代初頭の遺跡は、石津川中下流域に分布する。左岸の海浜部に近い砂堆上に営まれた船尾西遺跡からは、布留式期の土器が出土した。²¹⁾ さらに四ヶ池遺跡北端の沖積平野部でもほぼ同時期の遺構、遺物の検出をみている。また石津川を遡ると、中流域の小阪遺跡で庄内式甕等の出土が知られる。²²⁾ 古墳時代前期の遺跡として、石津川河口付近に石津遺跡、²³⁾ 下田遺跡南方の左岸氾濫平野上に前期後半の鳳東町遺跡が立地している。²⁴⁾ 丘陵地帯では伏尾遺跡、²⁵⁾ 大庭寺遺跡でも古式土師器の出土が知られている。このように石津川下流域では、庄内式併行期以降に沖積平野へ次々と集落が進出し、また中流域の丘陵上においても当該期の集落が点々と経営されていた状況が窺える。やや南下すると、池上曾根遺跡と至近距離にある豊中遺跡、七ノ坪遺跡、楓尾川流域の府中遺跡、和氣遺跡などが同時期の遺跡として挙げられる。

石津川右岸に広がる中位段丘を中心とした三国ヶ丘台地は、古く「百舌鳥野」と呼ばれた地である。²⁶⁾ この段丘上には国内でも屈指の大古墳群である百舌鳥古墳群が展開をみせている。古墳群の規模は南北約4km、東西約3.8kmに及ぶ。百舌鳥古墳群については詳述するまでもないが、段丘先端に立地する前

Tab. 2 下田遺跡周辺遺跡名(NoはFig. 3と対応)

1 下田遺跡	17 野々井遺跡	33 信太千塚古墳群
2 四ヶ池遺跡	18 野々井西遺跡	34 池上曾根遺跡
3 船尾西遺跡	19 神野町遺跡	35 七ノ坪遺跡
4 石津遺跡	20 百舌鳥陵南遺跡	36 豊中遺跡
5 鶴田町遺跡	21 土師遺跡	37 府中遺跡
6 凤東町遺跡	22 長曾根遺跡	38 和泉国府跡
7 毛穴遺跡	23 百舌鳥古墳群	39 和氣遺跡
8 上遺跡	24 浜寺四ヶ塚古墳群	40 観音寺山遺跡
9 鉢の宮遺跡	25 羽衣砂丘遺跡	41 百舌鳥陵南庵寺
10 万崎遺跡	26 伽羅橋遺跡	42 家原寺
11 万崎池遺跡	27 水源地遺跡	43 信太寺跡(観音寺跡)
12 太平寺遺跡	28 大園遺跡	44 和泉寺跡
13 小阪遺跡	29 黄金塚古墳	45 坂本寺跡(禪寂寺)
14 伏尾遺跡	30 上町遺跡	● 古墳(主として円墳)
15 深田遺跡	31 懸ヶ池遺跡	▲ 陶色塗跡群
16 大庭寺遺跡	32 丸笠山古墳	

期末～中期初頭の乳の岡古墳築造を嚆矢とし、これ以後は中期を中心に後期まで大小の古墳が造営された。全国最大の大山古墳をはじめ、ミサンザイ古墳・ニサンザイ古墳・イタスケ古墳・御廟山古墳など、国内を代表する巨大前方後円墳を擁し、また中小の独立墳・陪冢からなる大古墳群として著名である。百舌鳥野の地は大王墓、およびその系譜に連なる首長層の墓域と考えられ、その性格・規模は河内の古市古墳群と比肩する。畿内政権の河内南部地域(後の和泉)進出を如実に反映する遺跡であるが、かつて100基余を数えた古墳も、現在では開発によって半数以上が姿を消した。

百舌鳥古墳群の南部にあたる百舌鳥川流域一帯には、中期～後期前半の遺構を主体とする土師遺跡が存在する。³⁴⁾ 土師遺跡は堅穴住居をはじめ埴輪円筒棺などを出土した広範囲に及ぶ大遺跡である。また陵南遺跡では多数の鉄滓のほか羽口・木製軸等を出土し、工房的性格が指摘されている。³⁵⁾ このように当地一帯は土師遺跡を中心として集落・工房・埴輪窯等、多数の遺構が濃密に分布しており、百舌鳥古墳群造営に携わった「土師」部に関連する集団の居住地・生産地との見解もある。

次にやや南の信太山丘陵に目を転じると、黄金塚古墳、信太山古墳群の中核をなす丸笠山古墳など、4世紀後半～末に前後して築造された在地系首長墓と目される前方後円墳が立地する。黄金塚古墳は丘陵の先端に占地する前方後円墳で、景初三年銘画文蒂四神四獸鏡をはじめ夥しい遺物を出土し、学史的にも重要な地位を占める。信太山丘陵先端段丘上には中期後半～後期末の大園遺跡が展開する。³⁶⁾ 大園遺跡は全てが掘立柱建物群で構成された大集落であり、その住居形態の先進性が注目されている。中期末の帆立貝式古墳である、大園古墳を擁した有力集団であったと推定されている。また大園遺跡の南方には、やはり中期の帆立貝式古墳である貝吹山古墳が築造された。³⁷⁾

なお百舌鳥古墳群の対岸、三光台地上の四ヶ池遺跡南方には、中期後半～後期の小規模な浜寺四ヶ塚古墳群の形成をみる。なかでも方墳の塔塚古墳の内部主体は、畿内で最古級の横穴式石室を有し、小規模ながらも百舌鳥古墳群と何らかの関係をもった古墳群と目されている。

古墳時代中期以降には堺市の泉北丘陵を中心に累々と窯が築かれ、多数の須恵器が生産された。これら陶邑窯跡群の展開は、和泉地方の産業を特色づける遺跡である。窯跡は堺市・大阪狭山市・和泉市・岸和田市にわたる広大な範囲に分布し、平安時代まで操業が継続された国内最大の窯業地帯であった。その総数は1000基に及ぶといわれる。石津川流域でも泉北丘陵に刻まれた樹枝状の開析谷を舞台に、多数の須恵器窯が経営された。特に中流域の丘陵上に立地するT K73号窯をはじめ、大庭寺遺跡、野々井西遺跡では、最古級の初期須恵器窯が検出されて注目を集めた。⁴¹⁾

陶邑窯跡群の周辺には、須恵器生産に関わる集落遺跡の存在が知られている。石津川流域では万崎池遺跡、菱木下遺跡から夥しい土壙墓が検出されており、須恵器工人の墓域と考えられている。また西浦橋遺跡、小阪遺跡などでは、須恵器生産に関与したとみなされる堅穴住居が確認され、さらに太平寺遺跡、深田遺跡、辻之遺跡は須恵器の集散、選別地との指摘もある。石津川右岸の支流である陶器川下流域では、古墳時代中期以降に田園遺跡などの集落遺跡が認められ、これら集落との関連が指摘される陶器千塚が丘陵上に営まれている。陶器千塚は和泉地方の代表的群集墳で、なかでも窯櫛墳の存在は須恵器生産集団との深い関わりを窺わせる。なお和泉地域最大の群集墳は、和泉市域の信太山丘陵上に営まれた信太千塚古墳群である。盟主墳とみなされる丸笠山古墳などの前方後円墳、大形円墳を核として、中小の円墳で構成された合計100基近くの古墳が確認されている。

さて和泉国は歴史的にみた場合、本来は河内国の一一部の地域であった。それが靈龜二(716)年、河内国南部地方(現在の堺市以南)から和泉郡・日根郡・大鳥郡の三郡が割かれ、和泉監として行政組織に組

み入れられた。和泉監とは、離宮であった珍努宮(和泉宮)の維持経営を目的とする独立した行政単位である。和泉監は天平一二(740)年に廃止されて、一旦当地は河内国に帰属する。しかし監の設置が契機となつたらしく、天平宝字元(757)年に再び三郡をもつて和泉国が設立され、これより以後は一国として独立するに至った。しかし国土面積は狭く人口も僅少であり、延喜式では下国の扱いを受けている。なお遺跡の所在する大鳥郡は、現在の堺市ほぼ全域と高石市全域にあたる。

和泉国の国政を司った和泉府の所在については、歴史地理的研究から和泉市府中町にあって、条里制地割に沿った五町四方の規模を有したと推定されている。事実この地域は熊野街道に接すると共に、主要地方道にあたる櫛尾街道・牛滝街道・大津街道の起点に位置しており、和泉国の交通の要衝を占めている。しかし当地は早くから市街地化が進んだことによって発掘も部分的な調査区域にとどまり、国衙等に関する考古学的成果は未だ稀薄である。⁵⁴⁾

下田遺跡は律令制下では和泉国大鳥郡大鳥郷内に位置する。大鳥は和名抄に「於保止利」と訓じており、現在も調査地の西方一帯には鳳北町・鳳中町・鳳東町・鳳西町など鳳を冠した町名が残っている。大鳥郡には大鳥郷の他に石津・蜂田・日部など十郷が知られるが、大鳥郷は郡・郷名を同じくし、また郷内には和泉国で唯一の延喜式内大社である大鳥神社が鎮座する。これらのことから大鳥郡は、郡の中心的な郷であったと考えられている。石津川流域を基盤とした古代氏族は、新撰姓氏錄に記載された日下部首・日下部(皇別)、大鳥連・蜂田連・和太連(神別・天神)、石津連(神別・天孫)、蜂田薬師(諸蕃・漢)の各氏族であったと考えられている。これら氏族の本拠地については、石津川河口付近の石津郷が石津連、下流域左岸の大鳥郷が大鳥連、右岸の蜂田郷が蜂田連(古くは蜂田首)・蜂田薬師、大鳥郷に接した中流域左岸の日下部郷が日下部首・日下部、さらに上流の和田郷が和太連の本貫にそれぞれ比定されている。これらの氏族のうち、なかでも大鳥郡の中核をなす大鳥郷を地盤とした大鳥連氏は、和泉国でも有力な地方豪族であったと推定されている。しかし律令体制下の中央においては特に傑出した人物を輩出しておらず、一族は専ら中下級官吏の任にあたっている。なお郷域内に所在する大鳥神社は、日本武尊と共に大鳥連祖神を祭神とし、本来は大鳥連氏が祖神を祀った社であったとされる。

さて律令国家へ向けての時代のうねりは、当時の人々に死生觀をはじめとする価値観・意識の大きな変革を促した。前代から連續と受け継がれてきた古墳の造営は、遺習となりやがて終焉を迎える、有力氏族は古墳に代わる権勢の表象として、寺院の建築に奔走するようになる。和泉地域北部の櫛尾川周辺でも、古代豪族の建立になると推定される寺院址が点々と分布している。しかし石津川周辺の氏寺はあまり知られておらず、寺院と氏族との関連には不明な点が多い。石津川の下流に合する百舌鳥川流域には、奈良時代前期の寺院跡として百舌鳥陵南庵寺の存在が知られている。氏寺とは性格を異にするが、石津川右岸の家原寺は僧行基が、その生家を慶雲四(707)年に仏閣に改修・開基した寺院である。和泉国は行基の出生地(大鳥郡蜂田郷)という理由もあって、寺院・布施屋造立や久米多池をはじめとする溜池築造など、行基にまつわる伝承は数多い。さらに南に開けた谷筋である和泉市櫛尾川流域では、和泉寺・坂本寺・信太寺・池田寺といった古代寺院の存在が知られている。いずれも7世紀中葉から8世紀前半の間に、相次いで造営された氏寺とされ、これらを建立した古代豪族との対比関係については、氏寺の例に乏しい石津川流域より明確にされている。さて奈良時代の創建になる櫛尾川上流の安楽寺は、承和六(839)年に和泉国国分寺の指定を受けた。これは既存の寺院を国分寺として昇格させたもので、国分尼寺も設置されなかった。またその実施自体が、天平一三(741)年の国分寺造営の詔勅から80余年を経過しており、この辺りが和泉国的事情をよく反映しているといえよう。

註

- (1) 1984「鈴の宮Ⅳ」『堺市文化財調査報告』第17集 堺市教育委員会
- (2) 1976「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書』第28輯 大阪府教育委員会
- (3) 1982「大園遺跡発掘調査概要・Ⅶ』大阪府教育委員会
- (4) 1985「浜寺船尾西遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第21集 堺市教育委員会
- (5) 1968「船尾四ヶ池遺跡調査概要」大阪府教育委員会
1981「四ヶ池遺跡昭和56年度発掘調査概要報告」四ヶ池遺跡調査会
- (6) 1983「鈴の宮Ⅲ」『堺市文化財調査報告』第11集 堺市教育委員会
- (7) 1984「西浦橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書II』附大阪文化財センター
- (8) 1992「小阪遺跡」大阪府教育委員会・附大阪文化財センター
- (9) 1977「四ヶ池遺跡」恵瑞池遺跡調査会・堺市教育委員会
1981「四ヶ池遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第8集 堺市教育委員会
- 1985「四ヶ池遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第22集 堺市教育委員会 他多数
- (10) 1985「上遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- (11) 前掲註(6)文献
- (12) 1984「西浦橋遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』附大阪文化財センター
- (13) 1984「菱木下遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』附大阪文化財センター
- (14) 1984「万崎池遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』附大阪文化財センター
- (15) 1981「万崎遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告書』第8集 堺市教育委員会
- (16) 1995「鶴田町遺跡発掘調査概要報告-TTC-1地点-」『堺市文化財調査概要報告』第51冊 堺市教育委員会
- (17) 1967「和泉市池上弥生式遺跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
1970「池上・四ヶ池」第2阪和国道内遺跡調査会 他多数
- (18) 1995「史跡池上曾根遺跡現地説明会資料」史跡池上曾根遺跡整備委員会
- (19) 1969「和泉觀音寺山亦生式遺跡発掘調査概要」觀音寺山調査団
- (20) 1966「信太山遺跡調査概報」信太山遺跡調査団
1970「和泉市信太山(鶴山台)豊の池遺跡発掘調査概報」和泉市教育委員会
- (21) 久野雄一郎 1991「堺市浜寺出土銅鐸の金屬学的調査報告」『館報X』堺市博物館
立石菜穂 1991「堺市浜寺昭和町出土の銅鐸について」『館報X』堺市博物館
- (22) 1978「船尾西遺跡発掘調査抄報」堺市教育委員会
- (23) 1984「四ヶ池遺跡-第83地区発掘調査報告書-」『堺市文化財調査報告書』第16集 堺市教育委員会
- (24) 1983「小阪遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第12集 堺市教育委員会
- 前掲註(8)文献
- (25) 森 浩一・田中英夫 1954「堺市石津町遺跡概報」『古代学研究』9
森 浩一・田中英夫 1961「堺市浜寺石津町遺跡の土師器と須恵器」『古代学研究』28
- (26) 1989「鳳東町遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第42集 堺市教育委員会
- (27) 1990「陶邑・伏尾遺跡A地区」『附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第60輯
- (28) 1989「陶邑・大庭寺遺跡」『附大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第41輯
- (29) 1976「豈中・古池遺跡発掘調査概報 そのIII」豈中・古池遺跡調査会
- (30) 1974「七ノ坪遺跡発掘調査概要」『大阪府文化財調査概要』1973-7 大阪府教育委員会
- (31) 1978「府中遺跡発掘調査概要・II」和泉市教育委員会
- (32) 1985「和氣遺跡発掘調査概要報告書」大阪府教育委員会
- (33) 1986「百舌鳥古墳群発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第25集 堺市教育委員会
1989「百舌鳥大塚山古墳発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第40集 堺市教育委員会 他多数
- (34) 1975「土師遺跡・49年度発掘調査概報」堺市教育委員会
1987「土師遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第36集 堺市教育委員会

- 1989「土師遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第42集 堺市教育委員会
- (35) 1975「陵南遺跡発掘調査報告書」陵南遺跡調査会
1985「陵南遺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第21集 堺市教育委員会
神谷正弘 1987「大阪府堺市百舌鳥陵南遺跡出土木製鞍の復元」『考古学雑誌』第72巻第3号
- (36) 末永雅雄・森 浩一・鶴田 晓 1954「和泉黄金塚古墳」
- (37) 1976「九笠山古墳」『大阪府教育委員会月報』28-10 大阪府教育委員会
1976「九笠山古墳」『大園遺跡発掘調査概要III』大阪府教育委員会
- (38) 1976「大園遺跡発掘調査概要2」大園遺跡調査会
- (39) 1982「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要II』和泉市教育委員会
1985「貝吹山古墳」『府中遺跡群発掘調査概要・V』和泉市教育委員会
- (40) 1992「塔塚古墳」『平成3年度国庫補助事業発掘調査報告書』堺市教育委員会
- (41) 1976「陶邑I」『大阪府文化財調査報告書』第28輯 大阪府教育委員会
1977「陶邑II」『大阪府文化財調査報告書』第29輯 大阪府教育委員会
1978「陶邑III」『大阪府文化財調査報告書』第30輯 大阪府教育委員会
1979「陶邑IV」『大阪府文化財調査報告書』第31輯 大阪府教育委員会
1980「陶邑V」『大阪府文化財調査報告書』第33輯 大阪府教育委員会
1988「陶邑VI」『大阪府文化財調査報告書』第35輯 大阪府教育委員会
1990「陶邑VII」『大阪府文化財調査報告書』第37輯 大阪府教育委員会 他多数
- (42) 1995「陶邑・大庭遺跡IV」『助大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第90輯
- (43) 1994「野々井西遺跡・ON231号窯」『助大阪府埋蔵文化財協会調査報告書』第86輯
- (44) 前掲註(14)文献
- (45) 前掲註(13)文献
- (46) 前掲註(12)文献
- (47) 前掲註(8)文献
- (48) 1984「太平寺遺跡」『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書I』助大阪文化財センター
- (49) 1972「陶邑・深田」『大阪府文化財調査抄報』第2輯 大阪府教育委員会
- (50) 1984「田園II」『堺市文化財調査報告』第19集 堀市教育委員会
- (51) 1992「陶器千塚発掘調査概要」大阪府教育委員会
1993「陶器千塚発掘調査概要・II」大阪府教育委員会
- (52) 1958「信太千塚」泉大津高等学校 社会科、生徒自治会地図クラブ
森 浩一編 1963「和泉信太千塚の記録」和泉市史編纂委員会・和泉市文化財保護委員会
- (53) 前掲註(37)文献
- (54) 1966「和泉国府跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- (55) 1977「土師遺跡発掘調査報告II」堺市教育委員会
1980「百舌鳥・陵南高寺跡発掘調査報告」『堺市文化財調査報告』第6集 堀市教育委員会
- (56) 1983「和泉寺」『府中遺跡群発掘調査概要III』和泉市教育委員会
- (57) 石田茂作 1936「禪寂寺」『飛鳥時代寺院址の研究』
1966「禪寂寺(坂本寺)跡発掘調査概要」大阪府教育委員会
- (58) 1979「信太寺跡発掘調査概要」和泉市教育委員会
1982「觀音寺遺跡発掘調査報告書」大阪府教育委員会
- (59) 石田茂作 1936「池田寺」『飛鳥時代寺院址の研究』
1979「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料I」大阪府教育委員会
1979「池田寺遺跡発掘調査現地説明会資料II」大阪府教育委員会

第3節 条里遺構

石津川流域に残る条里遺構は、右岸の段丘面上と谷底平野・沖積平野にみることができる。和泉地域北部の条里制施行範囲は、大鳥郡の南に位置する和泉郡、すなわち現在の和泉市・泉大津市・忠岡町・岸和田市・貝塚市域では、谷底平野・沖積平野をはじめとして中低位段丘面上に広く条里地割を遺存しており、広範囲にわたって積極的に段丘面の開発が行われていたことがわかる。しかし石津川の左岸段丘面上(三光台地)には里の存在が想定されてはいるが、可耕地としての開発は遅れていたようで、現況からは条里遺構を捉えることができない。またいざれの地域でも、海岸平野部には条里遺構は遺存しないようである。当地をはじめとして和泉国は、海岸線と背後に迫る山塊とに挟まれ、地理的に可耕に適した広い沃野には恵まれていなかった。従って条里的施行にあたっては可耕地の形状に大きく制約を受け、地形に即した条里地割となっている。石津川流域でも開拓された谷底平野、及び流路方向に沿うがごとく、N-16°-Wの偏差をもって条里区画が施行されている。石津川下流域ではその流路を貫く条里境界線が郷界で、西が大鳥郷・東が石津郷となっていた。

下田遺跡周辺の左岸には比較的近年まで条里地割が良好に残存していた。しかし戦後に急速度で進められた開発により、地表部分に著しい改変を受けながら今日に至っている。大規模開発以前の地割・字名(Fig. 4)をみると、調査地周辺には坪数を示す遺称が散見される。この序列関係から坪並方式や里の範囲の復原が可能である。大鳥郡域の条里坪付については従来より復原的考察がなされており、基本的に北西隅に始まり南下北上を繰り返して北東隅で終結する、千鳥式の坪並方式が施行されていたことが明らかとなっている。なお和泉国では千鳥式坪並が広く施行されたが、和泉郡・日根郡の方式は大鳥郡とは異なり、北西隅を起点として南東隅で終結する千鳥式であった。条・里名の位置表示は和泉国では序数詞が用いられず、里名には固有名詞を冠するのが通例であった。大鳥郡内でも大鳥社流記などの文献に大鳥里・原里・布施屋・水合里・郡里といった地名が記され、十余の里名が知られている。また大鳥神社が平地部の大鳥里と西の丘陵部にあたる原里にまたがり、またそれらの南に郡里・南原里が位置するなど、史料に記載された里名相互の位置的関係からある程度解明されている(Fig. 5)。またこうした成果から、現状では条里遺構を確認することができない三光台地上でも、開発は遅れたようではあるが、里の境界区画の存在は想定されている。

さて調査地の大鳥郡条里内での位置的関係について明らかにしておきたい。調査地の一部は大鳥里にあたるが、大半は大鳥里の直北に位置する里内に含まれる。その里名は文献に残されておらず、現在のところ不明である。字名では祝黒、高田、水陰、及び大鳥神社御旅所周辺にはほぼ該当する。調査地周辺は現状でも条里地割が明瞭に遺存する区域であり、条里境界は里道や水路等によって区画されている。条里坪付を復原すると、北西から17の坪(A-2区), 20の坪(A-3区), 19の坪(A-1区), 19・30の坪(B-2区), 30の坪(B-3区), 大鳥里25の坪(B-1区)となる。1区画内に坪境界を包括する調査区もあるって、区画溝などが検出されている。

参考文献

- 岡田隆夫 1976 「和泉国大鳥郷における開発と展開」『日本社会経済史研究』古代・中世編 吉川弘文館

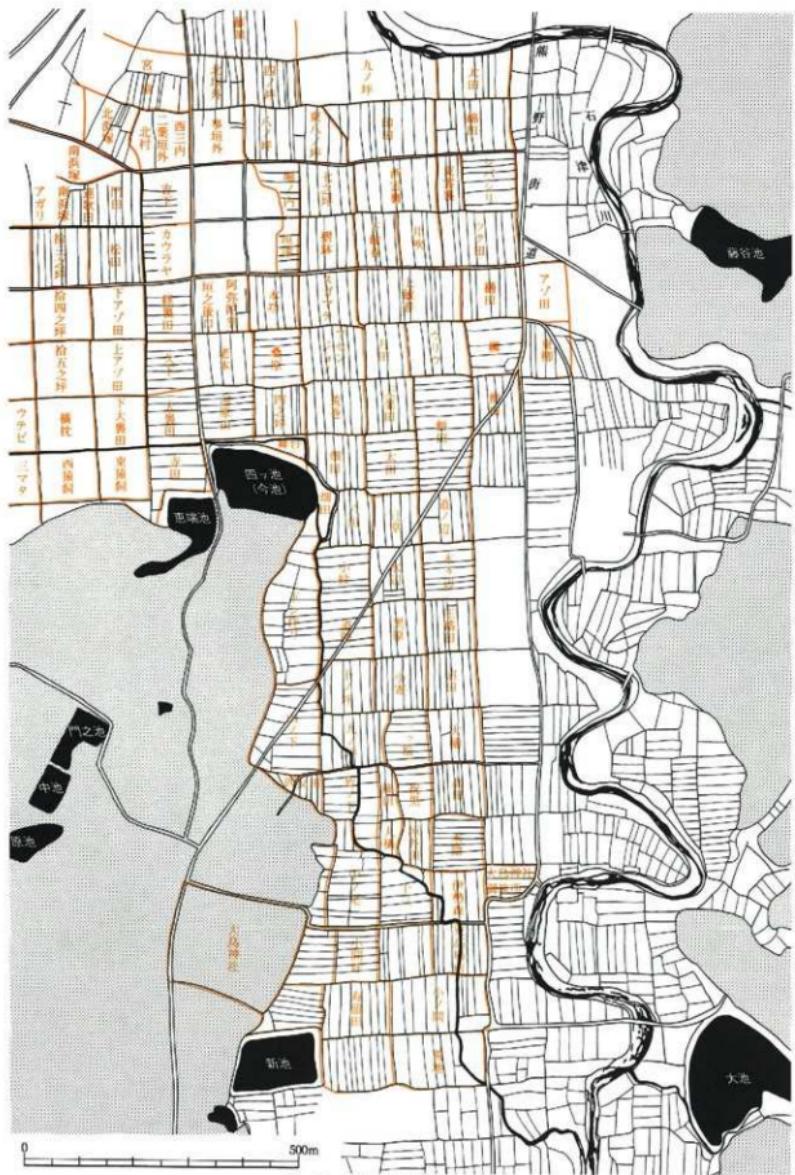


Fig. 4 調査地周辺地割・字名図



Fig. 5 石津川流域の条里地割

第3章 遺跡の概要

第1節 既往の調査

下田遺跡は1987年度に堺市教育委員会による試掘調査で、住居址や多数の土器の包蔵が確認されて周知の遺跡となって以来、これまでに幾度か発掘調査のメスが加えられてきた (Fig. 6)。

下田遺跡の範囲内で計画されたマンション建設を契機に、堺市教育委員会と関連機関との間で協議が重ねられた結果、株式会社丸紅に委託を受けて新たに編成された下田遺跡調査団が、1988年度に発掘調査を実施した。堺市教育委員会では下田遺跡に関し、独自に T S D の遺跡略号(つくの・しもだの意)を使用しており、下田遺跡調査団調査地を T S D - 1 地点と呼称している。T S D - 1 地点は、今回の調査地点 A 区の北側至近距離にあたる区域である。

調査はマンション建設予定地の建物本体部分(第1調査区)と、浄化槽・防火水槽部分(第2調査区)の2地区に分かれた合計約1200m²について実施された (Fig. 7)。その結果、弥生時代前期～古墳時代後期・中世まで幅広い時代に及ぶ遺構、遺物が検出され、多大な成果が挙げられるに至った。

基本土層は50～80cmの水平堆積した中・近世耕作土層及び古墳前期の遺物包含層である。これら包含層の下に、弥生～古墳時代の遺構面が存在した。

この調査で確認された最も古い遺構は溝遺構7で、弥生前期の凸帯文土器や石器が出土した。しかし遺跡の中核をなす時代は弥生時代中期・古墳時代前期～中期である。弥生時代中期(第III様式)の遺構として円形竪穴住居が2棟(住居址5・6)、溝(溝遺構6)・土器廃棄土坑などがある。住居はいずれも4柱穴で、貯蔵穴・中央ピットを備えている。古墳時代前期～中期にかけての時期には、集落が最も栄えたたらしく合計7棟の方形もしくは隅丸方形の竪穴住居が検出されている(住居址1～4・7～9)。いずれも柱穴は確認されていない。住居址1(前期)・住居址2(中期)にはベッド状遺構が巡らされている。出土遺物は総じて僅少であったが、須恵器出現以後の住居址3・4では須恵器杯・高杯・瓶、土師器壺など多数の土器類が出土している。このほか弥生時代末～古墳時代初頭と考えられる2基の土器棺墓が検出された。しかし、これらにも増して重要な遺構は、流路1とされた古墳時代前期の河道である。その出土遺物は質量共に際立っており、下田遺跡の卓越性を裏づける成果が得られている。

流路1は石津川の河道痕跡とされる遺構で、北から南へ蛇行した流路が第1調査区の東端部分で検出されている。出土土器の主体は膨大な量の布留式土器で占められており、壺・鉢・高杯・器台・甕などの器種が認められ、なかには丹塗りの小形丸底壺もみられた。さらに小形器台・小形丸底壺・有段口縁鉢といった小形の精製土器も含まれており、多様な器種構成をみせている (Fig. 8)。また土器と共に同時期の木製品も多量に検出された。蓋(衣笠)・琴の他、鍬・鋤・鎌や斧の柄といった農具、編み道具である木錘、一般生活具として容器、建築部材などの種類がある。いずれも出土状況から土器と共に一括性が高い遺物群と考えられている。

出土した蓋 (Fig. 9) は軸と腕木からなる笠骨で、一部には薄く朱の塗られた痕跡が認められている。腕木は壺形の軸を中心として5方向に延びているが、これは素材のカヤの枝が放射状に張る性質をそのまま利用したものである。琴はほぼ完形で出土しており、平らな上板と湾曲した下板を重ねて要所を構で緩り、その間に2枚の半月状の小板を装置して共鳴槽としたものであった。

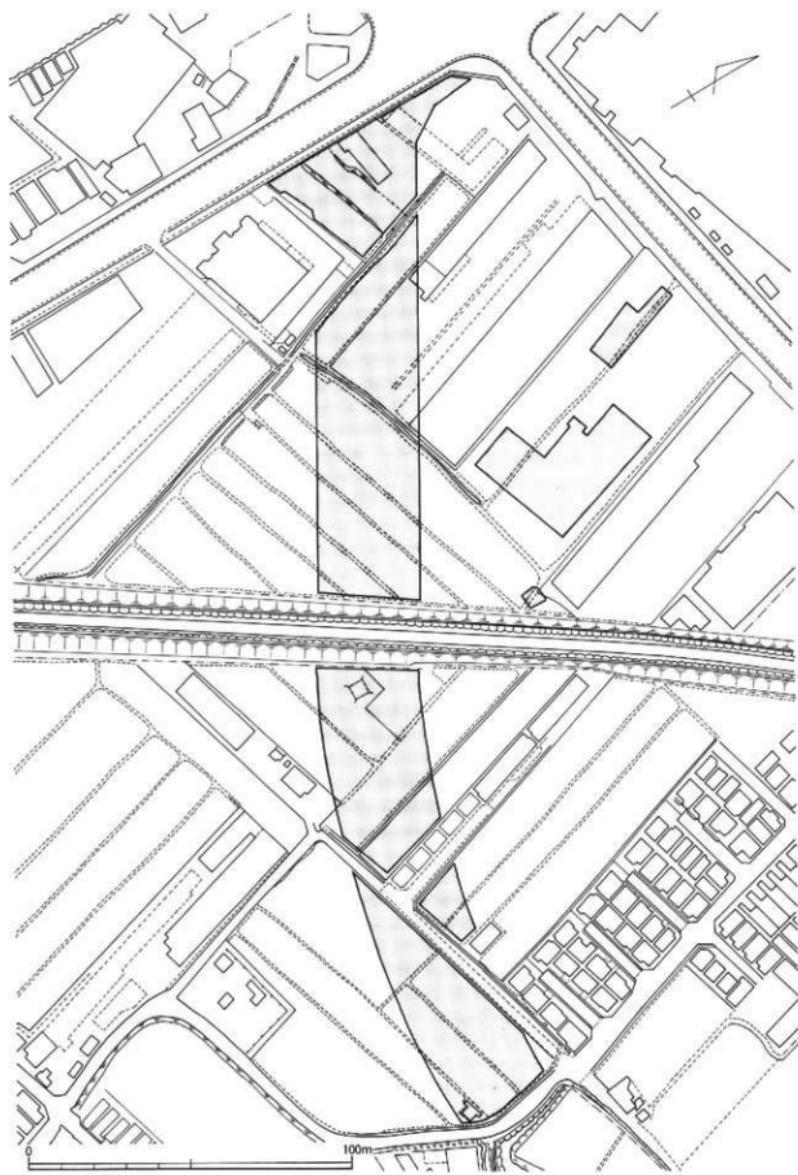


Fig. 6 全調査区の位置関係



Fig. 7 TSD-1 遺構配置図

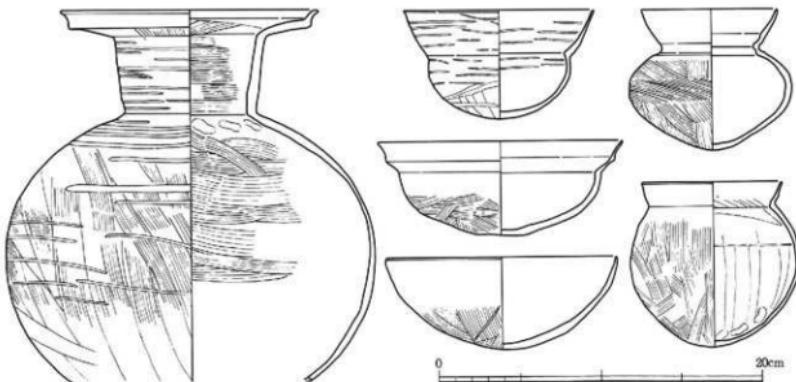


Fig. 8 TSD-1 河道1 出土土器

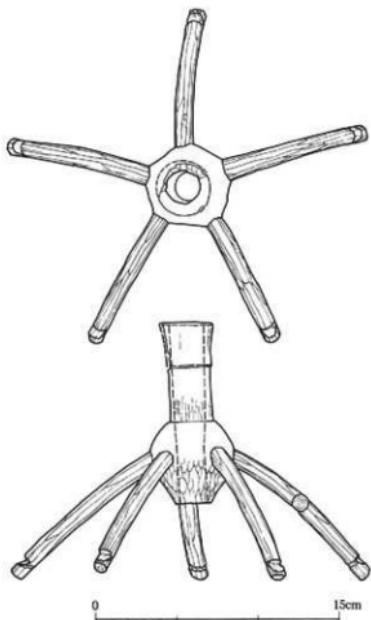


Fig. 9 TSD-1 河道1 出土蓋

この調査では古墳時代前期の下田遺跡の集落が、蓋や琴を所有し、あるいは保管する集落であったことが明確となり、その性格は一般集落とは異なっていたと解釈せざるを得ない。なかでも古代社会において権威の象徴として用いられた蓋の出土は、下田集落を統括した特定個人、あるいは集団の社会的地位・階層を示唆する遺物として捉えられよう。近接地にある四ッ池遺跡との関連も改めて重視される結果となり、石津川流域のみならず、和泉地域の古代史研究の上に極めて重要な課題を提起した。

1992年度には堺市教育委員会社会教育課文化財保護係が周辺地域で試掘調査を実施、翌1993年度には関西電力株式会社の送電線移設に伴い、試掘データをもとに堺市立埋蔵文化財センターが発掘調査を実施した。²⁾ TSD-2地点と名付けられた調査区は今回の調査地点A区の東に位置する。調査面積は25m²と狭少ながら5世紀後半までの溝、それ以前の自然流路(SD02)が検出された。調査面積の関係から出土遺物に乏しいが、SD02は遺構の時期や位置からTSD-1地点の河道1に連続すると解釈され、河道の流路方向を知る上で示唆を与えた。

註

- (1) 下田遺跡調査団 1990『下田遺跡発掘調査概要 しもだ』
- (2) 堺市教育委員会 1994『下田遺跡発掘調査概要報告-TSD-2 地点・堺市下田町一』

第2節 調査の概要

今回の調査では、銅鐸をはじめとして多量の土器・木器など特筆すべき遺物群の出土、堅穴住居その他の集落関連遺構の検出など、多大な成果を挙げることができた。本節では各時代を通じ主要な遺構を概観するが、その前に調査区の設定について若干の補足を行っておく必要があろう。

調査区内での遺構等の位置は、既に述べた如く旧協会の「規程」による地区割、及び国土座標で表示される。しかし、これら絶対的な位置表示とは別に、調査区内はJR線路敷・保線用地・里道・農業用水路などで分断されていたため、実際の調査にあたっては地形上の制約を受けて独自に調査区を設定せざるを得なかった(Fig.10)。調査区はまずJR線を境界として北西側をA区、南東側をB区と大別した。またそれぞれの地区内でも、里道・水路などの存在により連続的な掘削が不可能な場合は、小区画に分割して調査した。これら小区画はA・B両地区名に、それぞれ調査に着手した順に番号を付与してその地区名とした。A区では1次調査で発掘したJR線に接する地区をA-1区、北西端の府道13号線に接する地区をA-2区とした。その中间部分は翌年に実施された2次調査の調査区で、これをA-3区とした。B区はJR線に接する地区をB-2区とし、南東方向へB-3、B-1区とした。なおこれらの小区画内においても、掘削に伴う残土運搬車両の進入路等の関係から、さらに幾つかの区画に分割し反転による調査が実施された区域がある。これら最小の区画は報告内容に直接関与するものではないが、参考までにFig.10中に破線で境界を表示した。

さて本調査では、縄文時代～近世まで各時期の遺構・遺物を検出した。これらは時代により連続し、あるいは断絶がある。中でも主体となるのは弥生時代中期・後期後半～古墳時代前期・中期の遺構・遺物群である。本節では、各時代ごとに各地区を通じてその概要を述べる。各地区で検出された主要遺構配置状況をFig.11～17に示している。

縄文時代晚期 最も時代を遡る自然地形は、縄文時代晚期の自然流路N R1302である。この河道はA-3区で検出され、調査期間等の関係からトレンチ調査による断面観察で確認されたにとどまり、平面的な把握には至らなかった。しかしA区を中心に、概ね南北方向に幅広く流れているようである。河道内堆積土から中期末～晚期の縄文土器が出土したが、晚期のものが主体をなす。弥生時代中期以後の大半の遺構は、この河道の埋没後に堆積した微砂層(VI層)の上に展開をみせていた。なお、この調査では、過去の歴史的な地震の証左である噴砂が遺構面上の隨所に観察されたが、A区でみられた噴出砂礫はN R1302の流路堆積物に由来するところが大であった。

弥生～古墳時代 やや時代幅が広くなるが、遺構によっては堆積土の上層・下層で弥生時代中期～後期、古墳時代初頭～前期に分かれるものがあり、また時代的な連続性から明確に帰属時期の判断のつきかねる遺構もあるので、弥生～古墳時代として包括的に述べる。

弥生時代の産物として特筆すべき遺物は、N R1104の北岸(右岸)付近で、土坑S X1101に埋納されていた扁平鉢式4区裂姿縄紋銅鐸である。この銅鐸については独自に章立てを行い詳述した(第5章)。

比較的まとまった遺構・遺物は弥生時代中期の段階で初めて捉えられる。中期の遺構・遺物は、A・B両区において検出されている。A-3区では円形堅穴住居S A1312が検出されたが、この期に属する住居はこの1棟のみであった。A-1区を蛇行しながら横断する自然河川N R1104は、石津川の旧河道と考えられる河川である。弥生時代中期には既に存在していたとみられ、古墳時代初頭まで継続して存在する。河道は激しく蛇行する南東から北西への流水があったと考えられることから、河川の南東が左

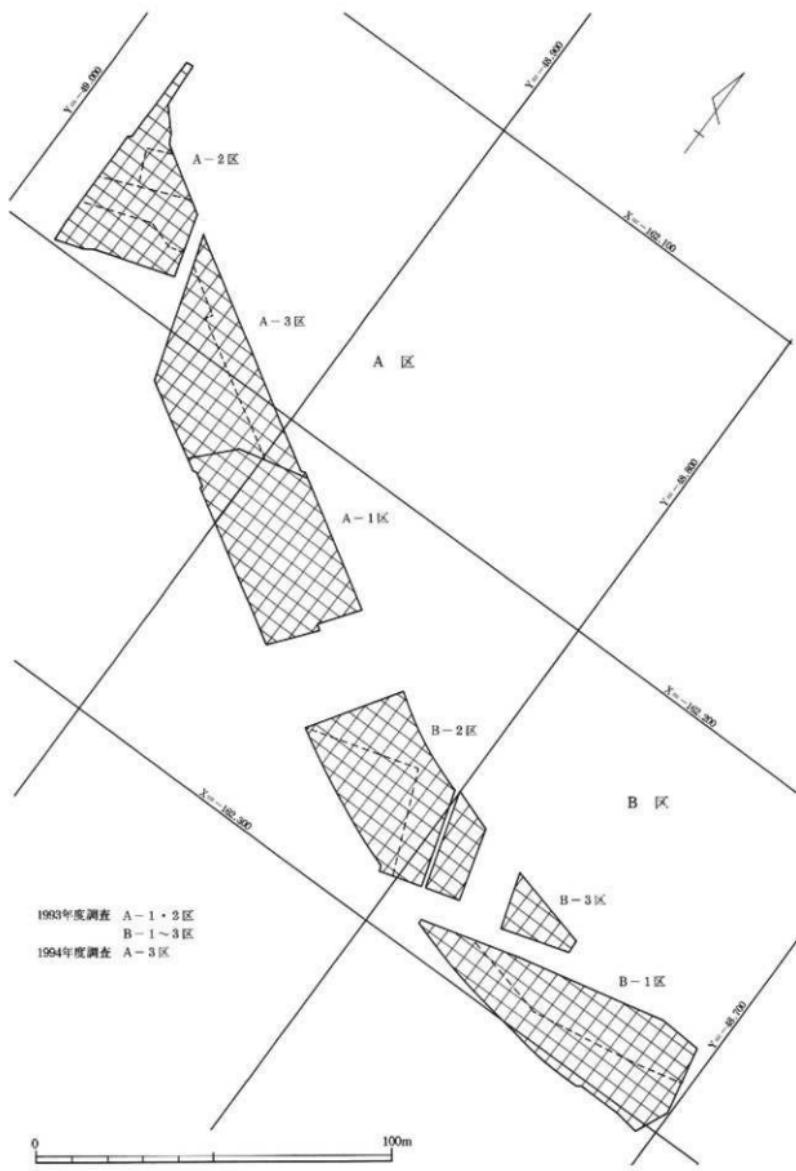


Fig.10 地区割詳細図

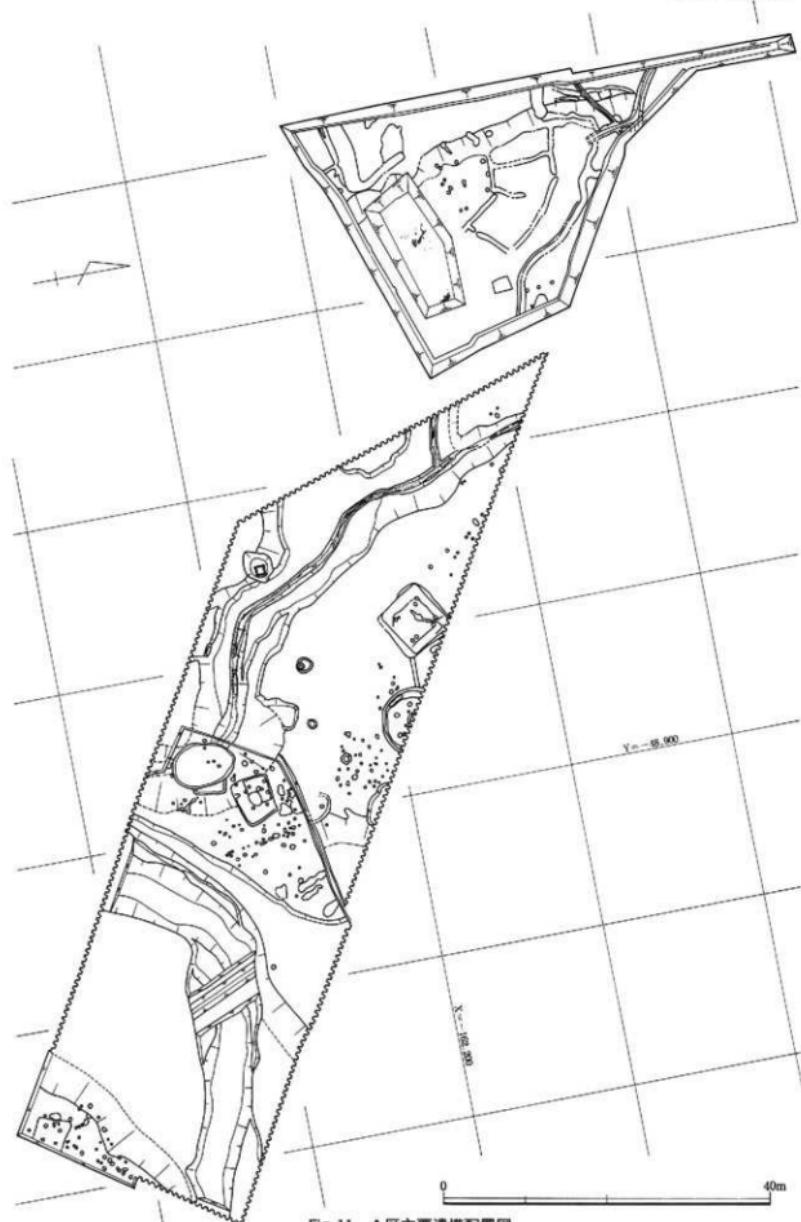


Fig. 11 A区主要遺構配置図



Fig. 12 A-1区遺構配置図

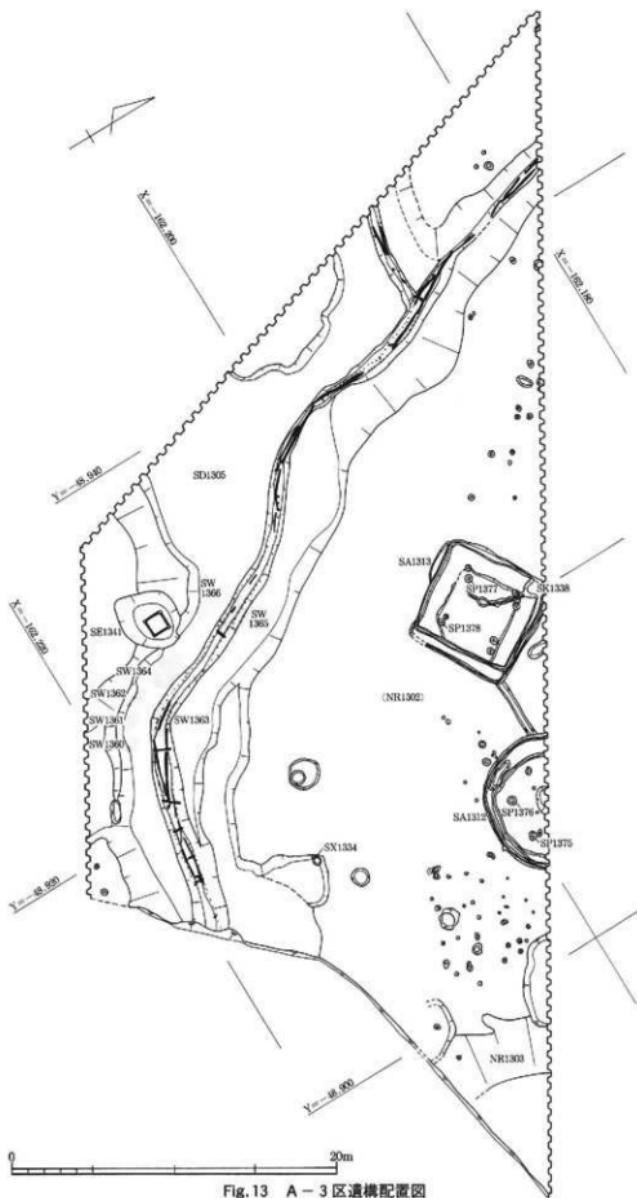


Fig. 13 A-3 区遺構配置図

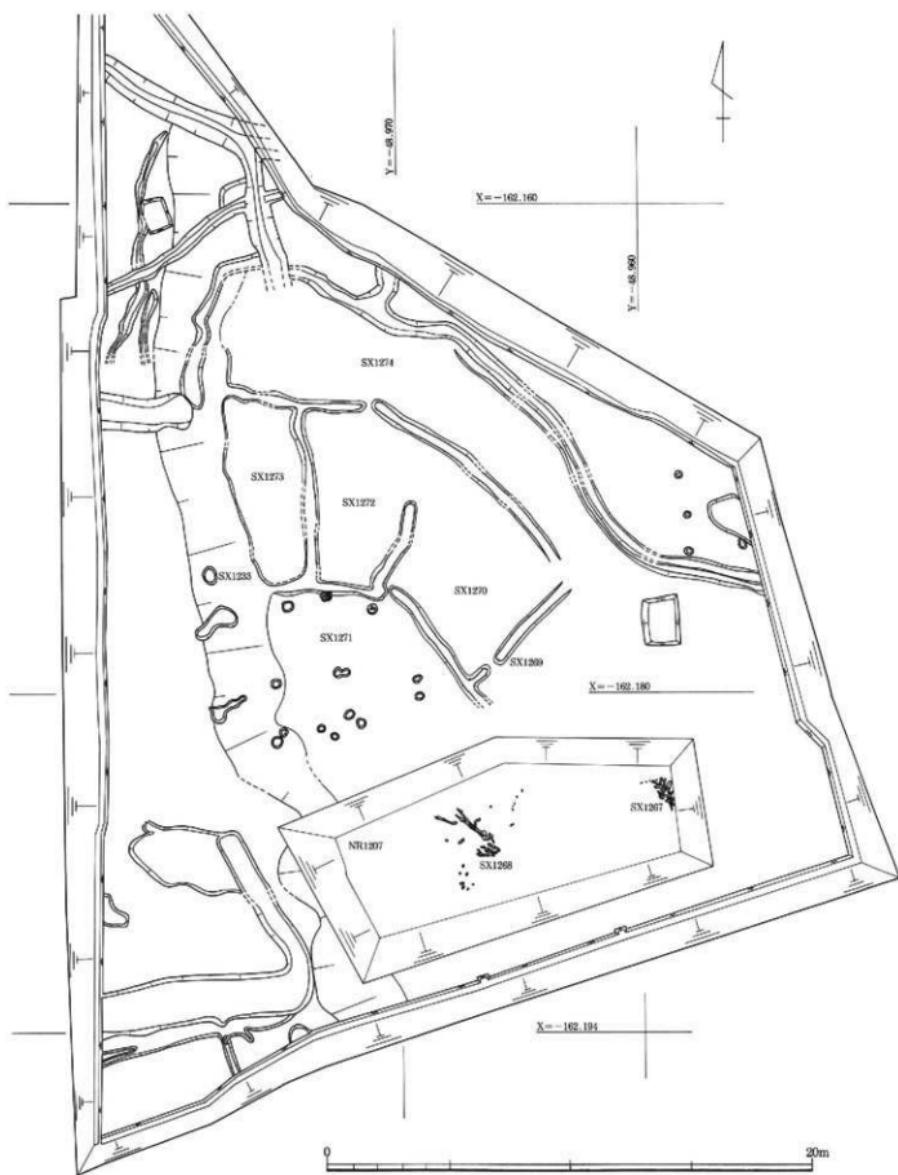


Fig. 14 A-2区構造配置図

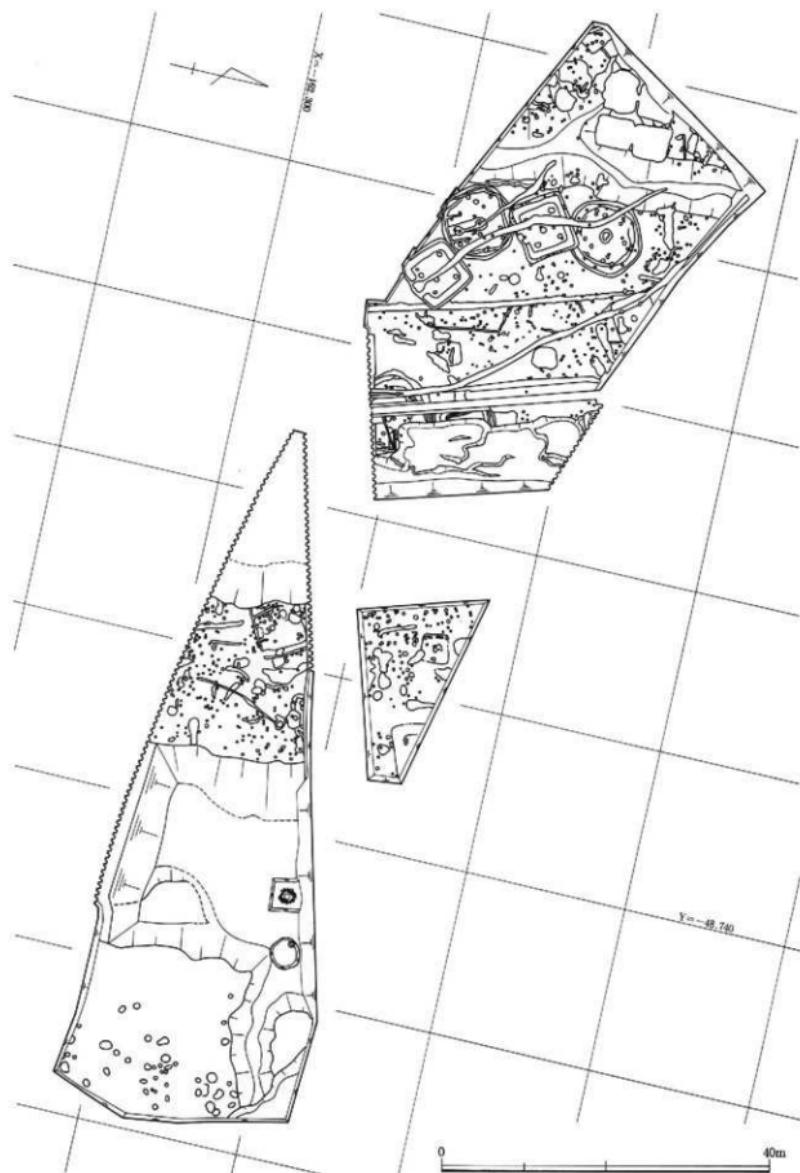


Fig. 15 B区主要遺構配置図



Fig. 16 B-2 区構造配置図

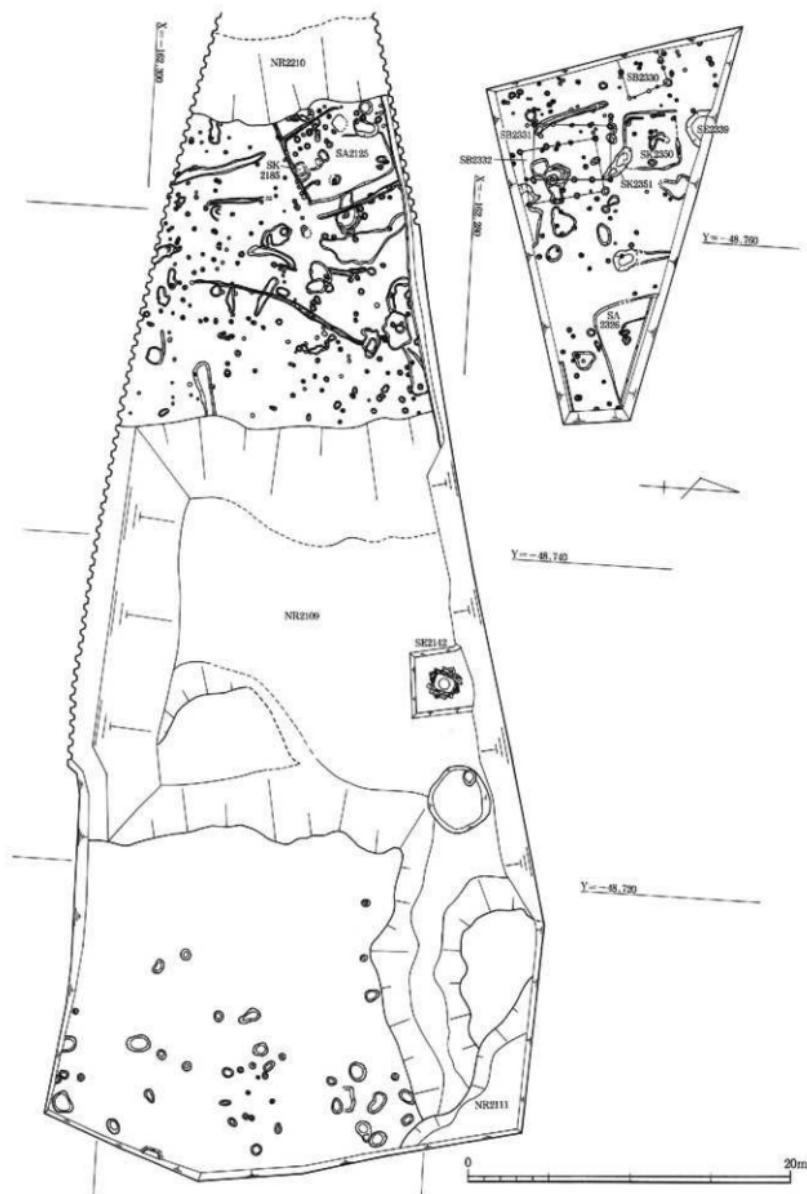


Fig. 17 B-1・3区遺構配置図

岸、北西が右岸に相当する。河道内堆積土からは弥生時代中期・後期～古墳時代初頭までの遺物が多量に出土した。N R1104の右岸にあたる河川西北部からは、大溝 S D1305が分岐するが、その分流点すなわち水口は調査区外にあると考えられ、調査区の範囲内では確認できなかった。S D1305はA-3区を縦断するように北流して調査区外に及ぶ溝で、本来は自然地形の小流路であったと考えられる。この溝は弥生時代中期の段階で溝底付近に多数の木杭が打設されており、農業用水溝として整備を受けたようである。また溝内堆積土の下層からは、中期の土器がまとまって出土した。N R1104の対岸にあたるB-2区では、ほぼ南北の方向をもつ溝 S D2206が検出され、溝内堆積土の下層から中期の土器が若干量出土している。この溝は北側でN R1104に合すると考えられるが、合流点は調査区外にある。

A-1区では土坑 S K1143から弥生時代中期の土器がまとまって出土している。土器棺墓はA区でS X1233・1334、B区でS X2235・2236と、合計4基が確認された。B区の2基の上器棺墓は、隣接してS D2206の周辺に分布する。しかしN R1104・S D1305などからみた全体的な土器の出土量から、中期段階における土器平面分布の主体はA区にあるといえよう。

続く弥生時代後期をみると、その前半期には遺構・遺物共に絶無であって生活の痕跡を欠く。しかしながら後半期に入るとこの地には再び集落が形成され、以後古墳時代前期に至るまで連綿と生活が営まれた。後期後半～末に属する堅穴住居は合計3棟が数えられ、いずれもB-2区で検出されている。このうち平面プランはS A2221が円形、S A2216・2218が隅角部が不明瞭ながら多角形と考えられる。後期後半の土器は、N R1104左岸の土器窯 S W1157で集中的に出土した他、河道内堆積土からも多量に検出された。中期から連続する溝 S D1305・S D2206では、堆積土の下層からこの時期の土器が出土している。その他の後期の遺構として、B-2区で土器棺墓 S X2237、B-3区で井戸 S E2339、さらにB区を中心として土坑が検出されている。

B-1区で検出された河道N R2109は、ほぼ南から北へ流れる埋没河川で、弥生～古墳時代後期の土器を出土する。すなわちこの河川が完全に埋没するのは古墳時代後期以降であるが、弥生～古墳時代初頭の遺構はその左岸にあたる西側に集中し、右岸の東側は極めて稀薄となることから、少なくとも弥生時代後期には存在していた可能性が高い。

古墳時代初頭(庄内式併行期)～前期(布留式期)に属する堅穴住居はA区でS A1313・1114・1115の3棟、B区でS A2217・2219・2220・2222～2224・2125・2326の8棟、計11棟が検出された。やや時期幅はあるが、A・B両地区の堅穴住居はそれぞれN R1104を挟んだ対岸に分布する。このうち確実に前期に属するものはA区のS A1313・1114の2棟と、B区のS A2223である。B区の堅穴住居は濃密な分布をみせ、古墳時代初頭のS A2217・2219は、弥生時代後期のS A2216・2218をそれぞれ切って構築されている。またS A2219に伴う排水溝 S D2254は、他の3棟を貫いて大溝 S D2206に注ぐ。これら並列的に連続した住居群は、すべてS D2206の東肩に形成されている。S D2206の堆積土中層以上には、弥生時代後期～古墳時代前期までの土器が大量に包含されていたが、これらは隣接する住居群から投棄された可能性が高い。B区では堅穴住居の他、S B2228・2229・2330～2332の、計5棟の掘立柱建物が検出された。その帰属する時代の決定は困難であるが、概ね古墳時代までとして大過ないであろう。その他の当該期の遺構には、井戸・土坑などがある。井戸はA-1区、N R1104の左岸に位置するS E1140が検出されたのみである。また土坑はB区を中心に検出されている。

弥生時代中期に形成されたA-3区のS D1305は、それ以後の堆積によって底が浅くなる。この堆積土の中層～上層には、多量の古式土師器が包含されていた。特に4層出土土器は古墳時代初頭のかなり

良好な一括資料と認められる。また2・3層である程度のまとまりをもって、一括性を認めうる土器集合体S W1360～1366が分布する。なお、最終埋立である1層は古墳時代前期に形成されている。

弥生時代中期以降、長らく機能していたA-1区の自然流路、N R1104は古墳時代初頭にはほぼ埋没するが、左岸を中心として庄内式併行期の土器溜S W1158が認められ、また河道内堆積土からも同時期の土器が検出されている。この河道は、続く前期前半に至って一部を痕跡的に残すのみとなった。当該期にはもはや河道としての流水機能が失われ、また自然地形に手を加えて溝として整えられた可能性があるため、自然河川とせず溝S D1108と称する。S D1108は多量の古式土器と共に、木製品・自然木を出土した下田遺跡を代表する遺構である。木製品には儀仗具と考えられる漆塗りの環付木製品の他、短甲、琴、祭祀用ミニチュアや、鎌・杵など農耕具、容器・腰掛など生活用品、建築部材など多彩な種類がある。また土器には壺、壺、鉢、高杯、小形の精製土器などが認められる。これら全般的な遺物相から、S D1108は下田遺跡調査団によって検出されたT S D-1地点の河道1と、連続する遺構であることがほぼ確実視される。古墳時代初頭の河道痕跡は、A-2区でもN R1207がトレーニング調査により部分的ながらも検出された。河道の川底付近には、多数の木杭が打設された遺構S X1267・1268が認められた。この河道はN R1104と連続する可能性もある。

調査区の北西端にあたるA-2区では、畦畔によって小区画に仕切られた水田遺構、S X1269～1274が検出された。出土遺物はほとんど認められなかったが、層位的には古墳時代初頭の河道N R1207の埋没後、その上層に営まれており、古墳時代前期を中心とした時代に經營されたと考えられる。

弥生時代後期から連続と営まれてきた集落は、この段階で一旦断絶すると考えられ、明らかな前期後半の遺構としては、B-2区において土坑S K2248・2249が単独で構築されたと留まる。

次に当地域が生活の舞台となるのは古墳時代中期以降であるが、遺構・遺物は量的に乏しい。中期の住居としては唯一、A-1区で須恵器を伴う方形竪穴住居S A1127が検出されている。前代から続くB-1区の河道N R2109はやはり石津川の旧河道のひとつと目され、堆積土には弥生時代中・後期の土器と共に、古墳時代中・後期の須恵器が主体的に包含され、また僅かに初期須恵器も認められた。この河道は古墳時代後期を境として急速に埋没の方向へ向かうようである。この他、須恵器を伴う遺構は、B-2区の溝S D2255が1条検出されたのみである。このように当該期の遺構・遺物は、前期までの状況と比較すると数量的に稀薄ではあるが、T S D-1地点では竪穴住居が確認されており、小規模ながらも集落が営まれていた様子が窺える。

古代～中世 古墳時代を境として以降は、住居など生活の痕跡は全く姿を消し、居住地は消滅すると考えられる。そしてN R1104・N R2109など旧河道の痕跡である窪地はことごとく埋められ、耕作化が押し進められたようである。これ以後には、目立った遺構は形成されていない。

調査地の周辺地形には条里地割が残存するが、A-3・B-2区では地割に沿った条里境界溝が検出されている。B-2区の境界溝S D2256の出土遺物は、13世紀代の埋没時期を示している。

近世 江戸時代にはB-1・2区を中心として、新たに自然流路N R2210・2111が形成される。N R2111は調査区の最東端をかすめるような位置で検出され、周辺地形に残存した石津川旧河道痕跡ともよく合致する。またN R2210はB-2区において、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構面を大きく垂直に切り崩しておらず、短期間に形成された激しい流れであったことを物語る。この時代には引き続いて水田經營を主体に土地利用がなされたようであり、耕作に供されたと考えられる木組井戸、S E1341、S E2142が検出されている。この他の遺構は全く認められなかった。

第4章 調査成果

第1節 基本層序

調査地の現況は水田・畑地で、耕作地の区画ごとに表層の標高は異なるが、およそA地区北端で7.9m、B地区南端で8.7mである。層準は試掘調査の結果を基礎とし、現地調査における現況の照合・検討から最終的に決定した。層名は、包含層を含む現耕土層からの層準を上層からI～V層、無遺物層をVI層とし、さらにVI層より下位の層準に関してはVII層以下とした。下田遺跡では調査区を縦横に走る河道や、埋納時期の決定という重要な課題の課せられた銅鐸周辺の層準については、章を改めて詳述することとし、本節では主としてVI層形成後に単純に堆積した層序について概観する。調査区内の層序について、河道や遺構等の影響を受けていない地点を選び、A～F地点の柱状図を作成した(Fig.18)。

I層 ほぼ全域に存在する現耕作土層で、灰色系微砂を主体とする。層厚は約15～40cmである。

II層 ほぼ全域に認められる近世耕作土層で、灰色系微砂を主体とするが、I層より明るい色調を呈する。層厚は約10～20cmで、その内部はさらに2～5cmに分層が可能な箇所もあり、数枚の耕土・床土層として認識される。II層最上部は現耕土層の床土の役割を果たす。

III層 灰黄色系微砂を主体とする中世耕作土層で、調査区のほぼ全域に分布する。II層と同様、層厚数cm単位で数枚の耕土・床土層が確認できる箇所がある。層厚は約15～35cmである。現地調査ではこの層位まで機械掘削を行った。

IV層 弥生中期～奈良時代の遺物包含層であるが、全域には分布せず部分的に認められる。灰色～黒褐色微砂を主体とし、層厚は約20cm前後である。

V層 弥生中期～古墳時代前期の遺物包含層で、概ね調査区の全域に分布するが、B-3地区中央以東には存在しない。褐灰色～黒褐色の暗色系の色調を呈した微砂を主体とする。V層は遺構面であるVI層を直接覆う層準であり、包含遺物量は多い。遺構のうちごく一部はV層中から形成されていることが確認されている。

VI層・VII層以下 VI層はいわゆる「地山」と呼ばれる無遺物層で、灰白色系の固結した微砂を主体とする。この層準はA-3地区で繩紋晚期の河道を完全に被覆し、またVII層で繩紋土器の細片が検出されていることから、厳密にいえば無遺物層と称するのは正しくない。しかしVI層からは遺物の出土が確認されず、VII層以下は繩紋晚期の自然地形である河道を認めた以外に遺構が存在しないこと、さらに全ての遺構がVI層以上の層準をベースとする点から、無遺物層と同等の扱いとする。VI層をベースとする遺構は弥生中期(VI様式)～古墳中期に形成されており、また数量的に大半を占めている。層厚は約20～60cm以上で、地点により差異があるが、概ね北西部ほど層厚を増すようである。VII層以下の層準についてA-1地区(C地点)で調査したが、少なくとも標高4.0～6.7mまでの間、層厚およそ20cm前後の地層が整然たる成層堆積を示し、さらにその分布は広範囲に及ぶようである。概ね上層では灰色系微砂、下層では暗緑灰色系粘土が堆積する。B地区的VII層から時期比定は不能ながら、繩紋土器の細片が極微量出土しており、またVII層をベースに繩紋晚期の河道が切り込むことから、晚期を下限に形成された層準といえ、この期を上限とするVI層とは不整合の関係にある。即ちVII層以下は繩紋時代晚期以前のある時間帯に属し、非常に安定した自然環境下で形成された層準であるといえよう。

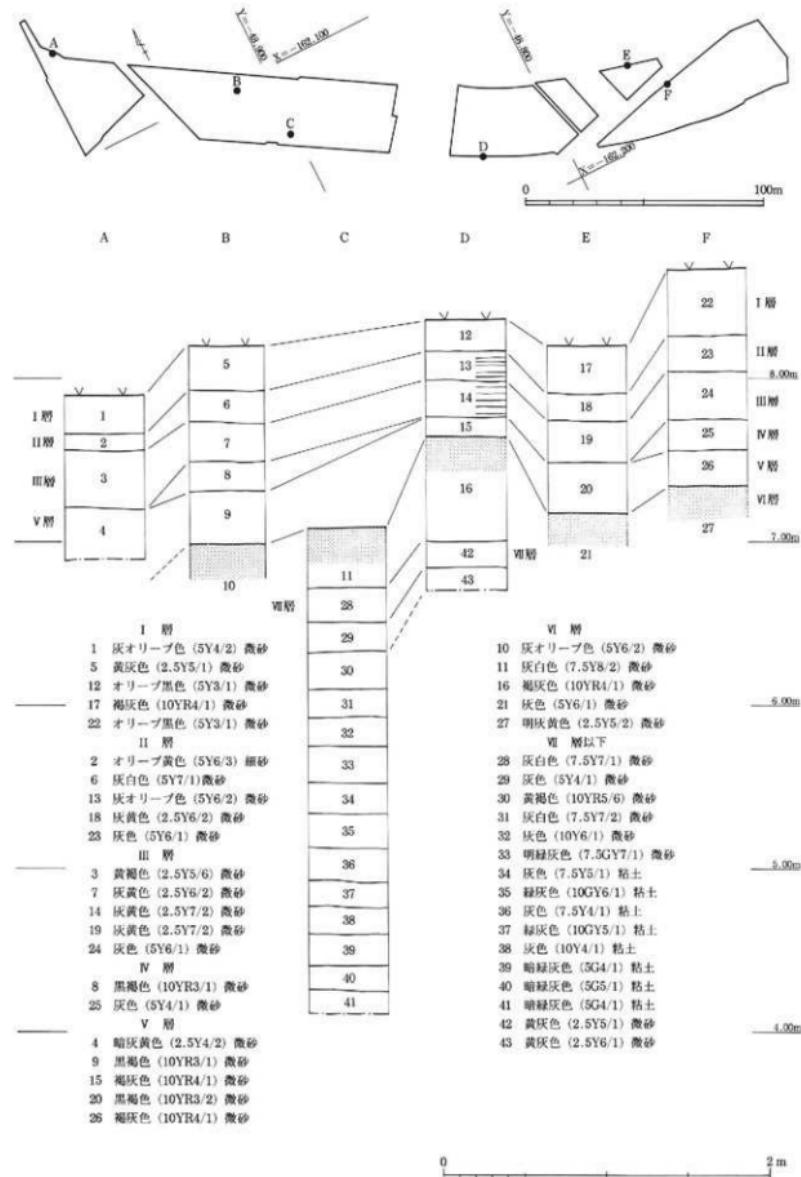


Fig. 18 基本層序柱状図

第2節 遺構と遺物

第1項 土器の観察

本書では、資料的に豊富な後期弥生土器・古式土師器について、編年作業のための器形分類を重点的に実施し、具体的な各種分類基準を考察篇第6章に記載した。報告篇並びに観察表等の記述はこの基準に準拠するが本項では述べず、畿内第V様式～古墳時代前期の土器製作技術について若干触れておきたい。土器の製作技術に関しては既に多くの論考が用意されており、ここではこれらの成果を踏まえながら本書の目的に沿って整理し、説明に必要な範囲で調整痕の観察を通じた基本的な土器製作技法を簡単に確認する。なお、本書における土器の各部名称はFig.19に基準を示した。

土器製作には各種の技法が駆使され、素地の原料となる粘土の採取選別から焼成に至るまで、多くの工程を経た技術体系のもとで土器が完成する。すなわち1個の土器の存在は、当時の土器製作技術体系の総体が具現化されたものに他ならない。土器作りの工程は、少なくとも素地作りを終えた粘土から土器を作る場合に限定すれば、素地が乾燥するに伴い大別して基本成形、器面調整、最終器面調整の各段階の存在が想定される。これらの工程で用いられる基本的な技法はタタキ技法、搔壁技法(ケズリ)、平滑技法(ハケ・ナデ等)、研磨技法(ミガキ)の4種類の技法に整理され、各種技法の大半はこれらのバリエーションとして捉えられる。基本成形は粘土紐の積み上げに始まって、タタキ技法や平滑技法により荒削りな土器形状が決定される段階である。壺・甕などでは体部をタタキ技法、口縁部を平滑技法で成形したものが多い。次の器面調整では、土器表面の凹凸を均し粘土紐相互の接着を向上させる目的で、主として平滑技法が用いられる。しかし、器面調整に関する技法では、土器形状にさほど大幅な変更が加えられることなく、基本形状はこの段階ではほぼ固定する。器面調整の最後には、紋様をもつべき土器には施紋、透孔をもつべき土器には穿孔の作業が行われる。この段階で製作を完了する土器も多いが、さらに乾燥が進んだ段階で、最終器面調整としてミガキが施される土器もある。この最終工程は付加的な技法で、これによって土器形状が変わることははない。以上が要約した土器作りの手順であるが、実際

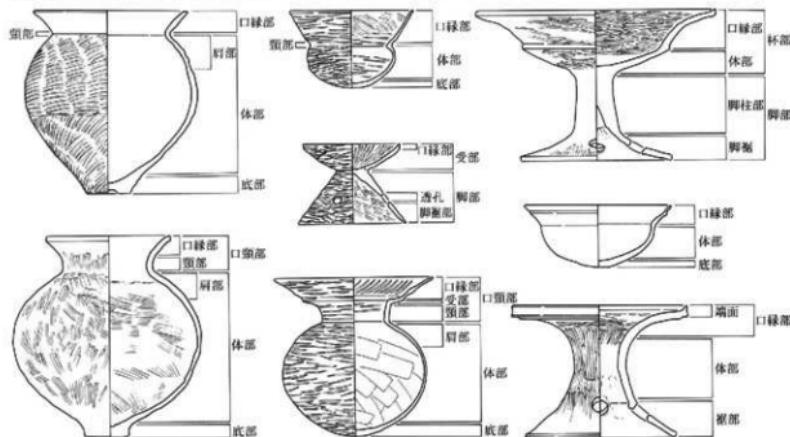


Fig. 19 土器の各部名称

的には小形品を除く甕・壺などの器種では、分割成形により基本成形と器面調整が交互に繰り返され、また高杯などの器種では脚柱部に絞りなどが加えられることがある。また壺や一部の鉢などは基本成形の段階で完成する器種であり、器壁外面にタタキ痕跡を明瞭に残す場合が多い。これに対して壺などの器種では、一般に器面調整によって成形に関わるタタキ痕跡をほぼ完全に消失させる。このように各段階での技法の採用は一様でなく、器種によって一定の選択が行われている。以下、土器製作の基本的な技法について、土器に記された成形・調整痕跡から確認する。

1. 主として基本成形に関与する技法

タタキ技法(Fig.20-1) 粘土紐で成形された直後に、平行線を刻んだ羽子板状の「タタキ板」で土器外壁面を叩いて土器の基本形態を作る技法。成形、粘土紐接着、叩き締めが同時に実行される。タタキ板による平行線を主とした圧痕をタタキメという。多くの上器がこの技法によって生み出されている。

搔壁技法(ケズリ・ヘラナデ) 「ケズリ」は刃部が鋭いへら状と推定される工具で器面を削って厚みを減じ、あるいは器形を整える技法(Fig.20-2)。器壁が半乾燥状態の段階で行われ、素地粘土表面付近の砂粒が工具の圧力によって動いた痕跡が観察できる。実測図ではケズリ方向が明らかな場合、砂粒の動く方向を矢印で表現している。ケズリの加えられる部位は器種等に応じて様々であるが、特に体部内面ケズリは庄内式併行期以降に散見される特徴的技法である。これに対して「ヘラナデ」はケズリを行なうほど乾燥が進んでおらず、素地粘土の水分がまだ多い状態で、へら状工具等で縦方向にナデる、あるいはケズル成形のための技法である(Fig.20-3)。高杯の脚柱部、小形器台の脚部などに散見され、この場合の調整痕跡は幅狭で不規則な面取り状を呈する。また壺などの体部にみられる場合も稀にある。いずれもケズリに比べて砂粒の動きが全く認められないか、あっても顕著ではない。

2. 主として器面調整に関与する技法

平滑技法(板ナデ・ハケナデ・ハケ・ナデ・ヨコナデ) 成形直後に行われる、あるいは成形に直接関与する場合も多い器面調整として、具体的には器表面に残された調整痕跡により「板ナデ」「ハケナデ」「ハケ」「ナデ」「ヨコナデ」と称される技法がある。器表面に残された調整痕跡の状態で以上の呼び分けが存在するが、これらの技法は粘土紐の巻上げや輪積みの痕跡を圧着させ、凹凸が生じた表面を平滑にならし、一部には搔壁の目的をもつ。これを総称して本書では「平滑技法」としておく。板ナデ、ハケナデ、ハケは硬質の素材、主に木片を原体とするため、原体表面の状態によって器面に残され

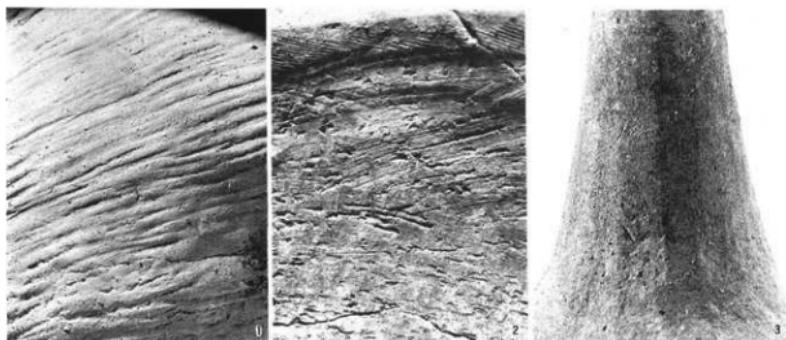


Fig. 20 基本成形に関与する技法

る調整痕も変化する。これを各段階に応じ、原体の当たりは観察できるが木理痕跡が認められないか、あるいは極めて浅く不鮮明な木理しか残さない調整を「板ナデ」(Fig.21-1)とする。それに対して原体の木理が明瞭なものを「ハケ」(Fig.21-3), またこの両者の間に位置する、弱い木理を残す調整を「ハケナデ」(Fig.21-2)とする。これらの調整は底部内面や胴部内面などに、板の木口面の圧痕をしばしば残している。ハケメの残存は、ハケ調整の後に調整が加えられることなく結果的に器面上に残されたもの他、ある程度の装飾を意図して残されたと考えられる個体もある。また底部内面には、しばしば板状工具の連続的な接触痕跡を残す回転平滑技法がみられる。これについては木理を残す、いわゆる蜘蛛の巣状ハケを「回転ハケ」、木理を残さないものを「回転板ナデ」と称する。以上の硬質素材を用いた平滑技法に対して「ナデ」は、口縁部や底部周辺など比較的複雑な屈曲をみせる部分を、軟質素材、概ね指やその他の柔軟性のある素材で水平方向に均す平滑技法である。静止状態の土器に対する水平方向以外の類似技法をも含めていう。器表面に視覚的に柔らかな擦痕を残すか、または擦痕も観察できないほど均されたものがある。なお小形の器種等では、ナデが基本成形と器面調整の両者に関与する場合がある。またナデのうち回転台など、ある程度の回転力の利用が想定されるものを「ヨコナデ」とする。ヨコナデには布・皮革などの素材によったと思われる、弱く細かく、しかも面的な幅広の擦痕をもつものが少なくない。この他、指頭を用いて粘土紐相互の接着や成形を行う手法として「ユビオサエ」があるが、平滑技法と併用される場合も多い。ユビオサエは内面底部や口縁と体部の接合部位など、工具の及びにくい部分によく残存する。

穿孔 透孔を有し得る器種には高杯、器台などがある。穿孔は平滑技法後に竹管などで行われたと考えられるが、素地の乾燥状態によってその形状には大別して以下のものが生じる。素地の水分量が多い場合の穿孔形態には、穿孔作業による器体の変形や損壊が極めて軽微なもの、あるいは穿孔工具で押された粘土が内面に拡張されるが、器体の損壊(剝離)を伴わないものがある。乾燥がやや進んでから穿孔された場合には、素地中の水分が少ないため、穿孔工具の圧力で穿孔部内面周辺が剝離を来している。

施紋 直線紋・波状紋・円形浮紋・竹管紋などの装飾は、平滑技法による下地面の平滑化が行われた後、素地中の水分量が多い段階に各種の工具を用いて施される。

3. 最終器面調整に関与する技法

研磨技法(ミガキ) 器表面を研磨する「ミガキ」は、器表面が半乾燥状態の段階で、ヘラ状工具などで

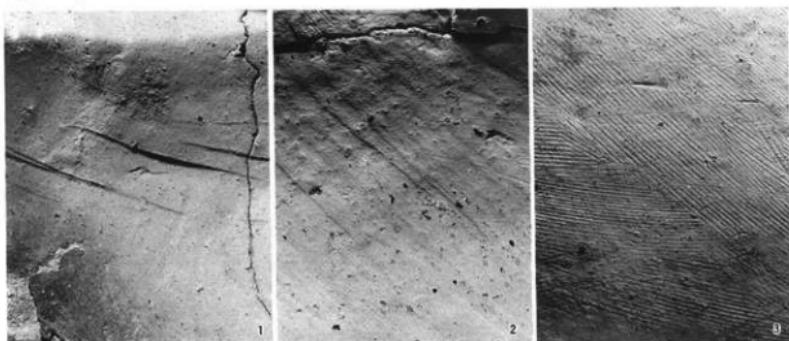


Fig.21 器面調整に関与する技法

調整される技法である。およそ土器作りが完成に近づいた最終段階で施されるが、この調整によって器形が変化することはない付加的な技法である。調整法の相違から以下の3類に分類する。

(1) ミガキA (Fig.22-1) 幼生土器、もしくはその系譜を引く伝統的研磨技法である。単位幅は2～7mm程度で、素材粘土の表面を均し締めて砂粒を沈め、器面全体に滑沢性を与えることを主眼としている。ある種の装飾性の付加や、液状内容物の漏出を防止する目的をもつ。線的であるミガキ1単位の方向に対し、ほぼ直交する方向に連続的にミガキを加え、面的な調整が行われる。ミガキ単位個々の長さは不揃いな場合が多い。ミガキの方向は概ね縦位の方向を主体とするが、器種によっては斜位・横位のものもある。外来系土器など、在地系とは出自の異なる可能性がある土器のうち、類似の技法があればこれを含める。

(2) ミガキB (Fig.22-2) 基本的に横方向、あるいは同心円状の細かいミガキ。緻密なものと、やや疎らなものがあり、調整の方向は横位が主体である。工具原体またはその使用法、あるいはその両者がミガキAとは異なる。単位幅は極めて狭く最大でも1mm程度、大半はそれ以下である。1単位の長さは短いものが多く、工具原体の接触痕跡は鋭い。器壁の薄い土器では、工具原体が壁面を損壊して内面まで貫通した例も稀にみられる。小形の個体の場合、横方向のミガキは主として手持ちによったと思われるが、回転力を利用した単位の長いもの、あるいは同心円状を呈するものもある。手持ちと考えられるミガキは、個々の単位の独立性が高く、緻密に施されたものでは近似した方向性を示すが、やや不揃いである。また回転力が強いか、あるいは接触痕跡の弱いものでは、ヨコナデと区別がつきにくい場合がある。庄内式併行期以降にみられる研磨技法である。

(3) ミガキC (Fig.22-3) 暗紋状に施された装飾的目的をもつミガキ。施紋部位は口縁部内面を主とするが、体部内面に認められる場合もある。正放射状・斜放射状に施紋される場合が多い。

なお付け加えておくが、出土土器実測図の提示方針に関して、同種遺物の量的な掲載には否定的な見解がある。条件的・時間的制約のもとで、整理作業を効率的に進めるための目的に沿った取捨選択は、なされて然るべき方法である。本書ではこれを認めた上で、一括性が高いと見なされる土器群について、あえて意図的に一定程度の個体数の提示に努めた。その目的は、当方が示した分類の中での個体差、すなわち個体がもつ特徴の許容範囲を視覚的に明示し、ひいてはその分類が果して妥当なものであるか否か、第三者に判断の機会を与えることにある。

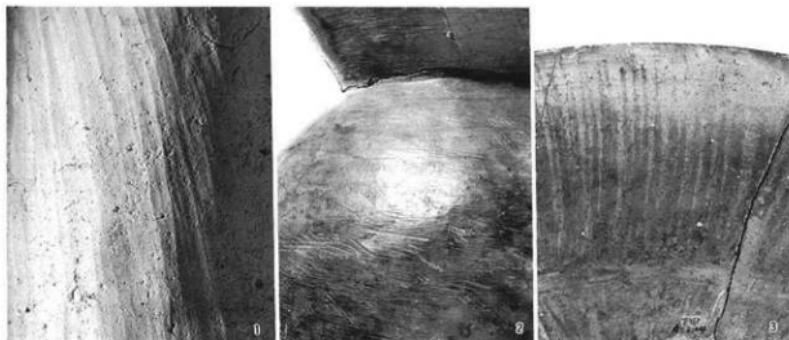


Fig. 22 最終器面調整に関する技法

第2項 繩紋時代

N R 1302

1. 造構(Fig.23~25, PL. 1)

繩紋時代に属する遺構は全地区において確認されなかつたが、A-3区では晩期の形成になる自然河川N R 1302が検出された。この河道は、A地区における後世(弥生時代中期以降)の遺構を掘削中に、存在が予測された。VI層上面から形成されたA-3区に位置する弥生時代中期の溝、S D1305の法面、並びに溝底には、溝と全く成因を異なる砂礫を主体とした堆積物が、部分的に露呈していた。この堆積物はVI層よりも下位に切込み面をもつことが明らかとなり、弥生時代中期よりさらに先行する流路の存在が想定された。このため調査の最終段階に、VI層上面からA-3区の北縁に沿わせて12mの間隔で2カ所のトレンチ(Tr. 1・2)を探入した結果、それぞれトレンチ内の全域で流路痕跡を確認した。

各トレンチからは繩紋土器が出土し、その時期相は大局的には大きな時代幅をもっておらず、同一の流路と考えられた。この河川N R 1302は切込み面をVII層上面にもち、川底はVII層以下の堆積層を大きく削り込んでいた。河川全体がVI層によってほぼ全面を被覆されているため、VI層の形成の上限を繩紋時代晩期、下限を弥生時代中期に置くことができる。トレンチ調査という制約上、流路幅を明らかにできなかつたが、B地区ではこの流路痕跡は全く確認されず、A-3区を中心としたA地区側に主たる流域を有していたと考えられる。トレンチ内の広い範囲で川底が確認されており、標高は浅い部分でT.P. 5.2m、深い部分でT.P. 3.5m以下、VII層上面からの深度は1.4~3.2m以上である。河道は地形に即し、概ね南から北に流路の方向をもっていたと考えられる。おそらく石津川の前身となる河川であろう。

N R 1302の堆積土は、砂礫・微砂を主体としている。比較的単純な堆積状況をみせるTr. 1では概ね下層から上層へ、砂礫・粗砂・中砂・細砂等からなる多数のラミナが形成された砂層・微砂層が、2mを越える厚さで堆積している。さらに最上層にはラミナが認められない均質な微砂層が形成されている。

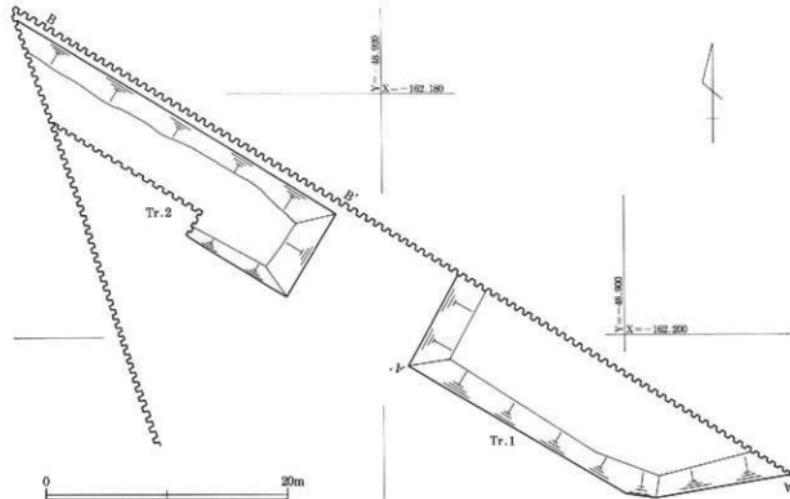


Fig. 23 Tr. 1 + Tr. 2配置図

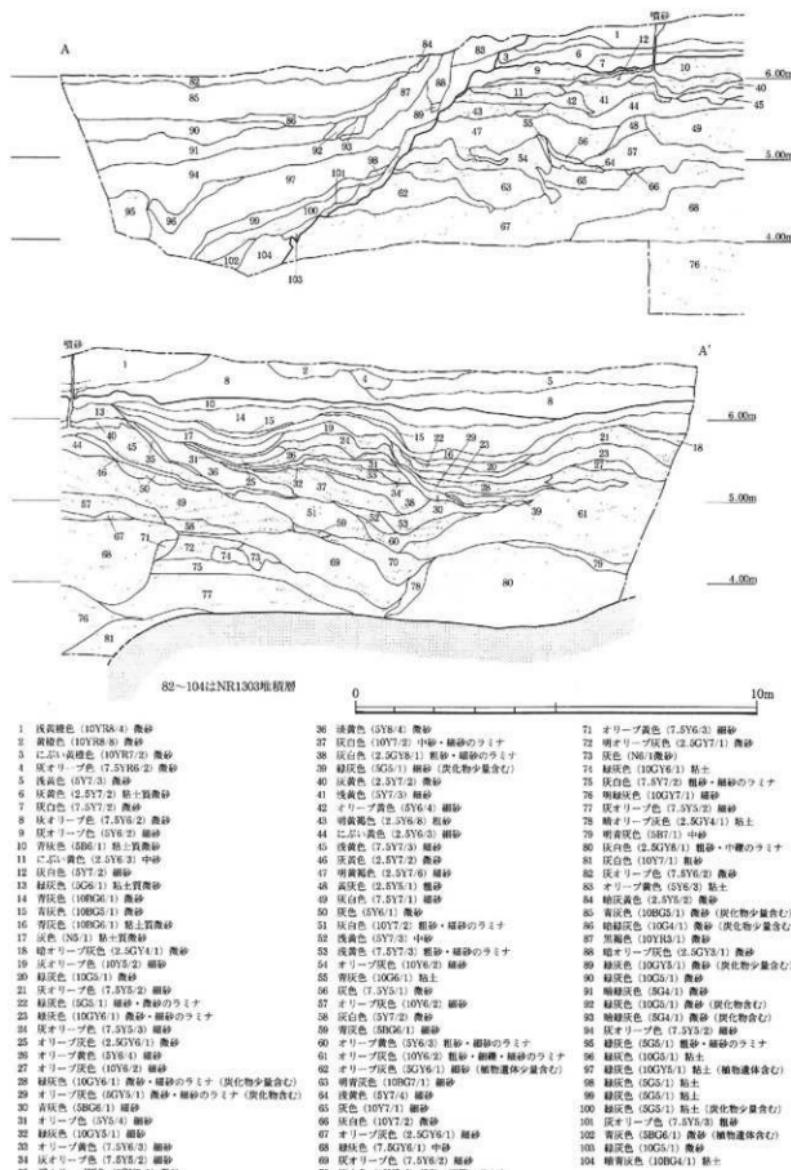


Fig. 24 N R1302断面図(Tr.1)

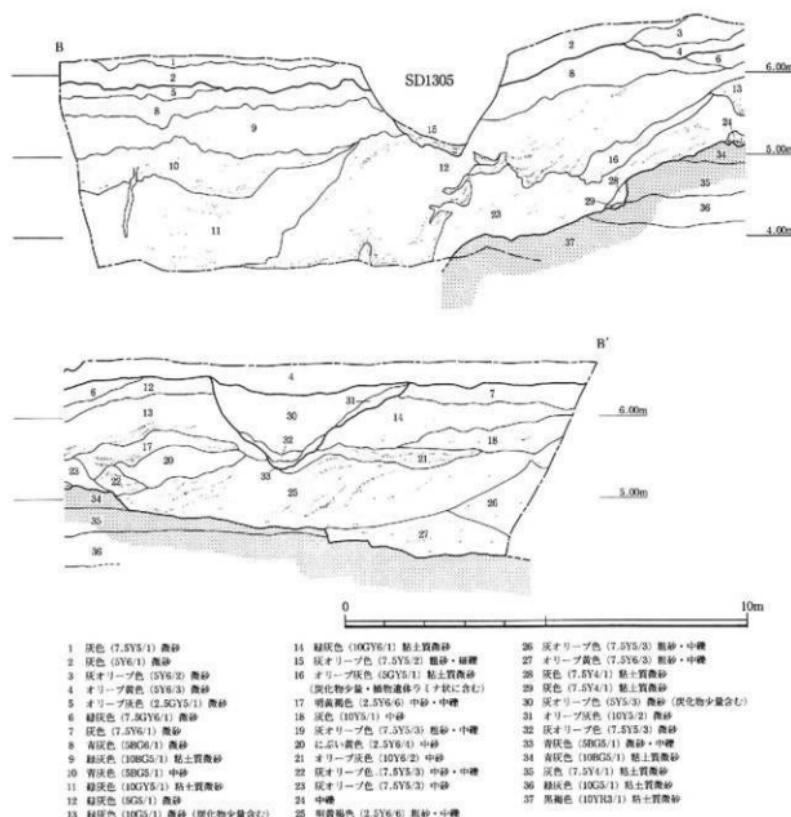


Fig. 25 N R1302断面図(Tr. 2)

微砂層は砂層・微砂層上面の激しい起伏を埋めるように0.2~0.5mの厚さで堆積しており、その上面はかなり平坦である。堆積層の川底近くの粗砂層には確かに流木の漂着をみると、特に中層以下の堆積土の状況は、相当激しい流れのあったことを示している。またこの地点では、過去の地震の証左である噴砂が数カ所にわたって認められた。これらはいずれも堆積層上部の細砂が、地震の振動で液状化現象を起こし、VI層を破って上層まで噴出したものであった。Tr. 2での流路の基盤層はTr. 1より標高が高く、VII層以下の整然と堆積した層準が露呈していた。これら基盤層は半ば凝結した均質な微砂層で、N R1302とは完全に不整合の関係にある。その形成年代は繩縄時代晚期を遙かに遡るであろう。さて、Tr. 2におけるN R1302の流路堆積物の状況は基本的にはTr. 1と共通するが、中層以下に流木、樹枝、木葉、種子などの植物遺体の堆積や、有機質に富んだラミナの発達がより顕著にみられる状況を呈していた。Tr. 2では堆積層の層界はいずれも北西側にレベルを下げており、この周辺での流心部は調査区より北西側にあると考えられる。しかしTr. 1では反対に、流心部は南東側に位置すると思われ、激し

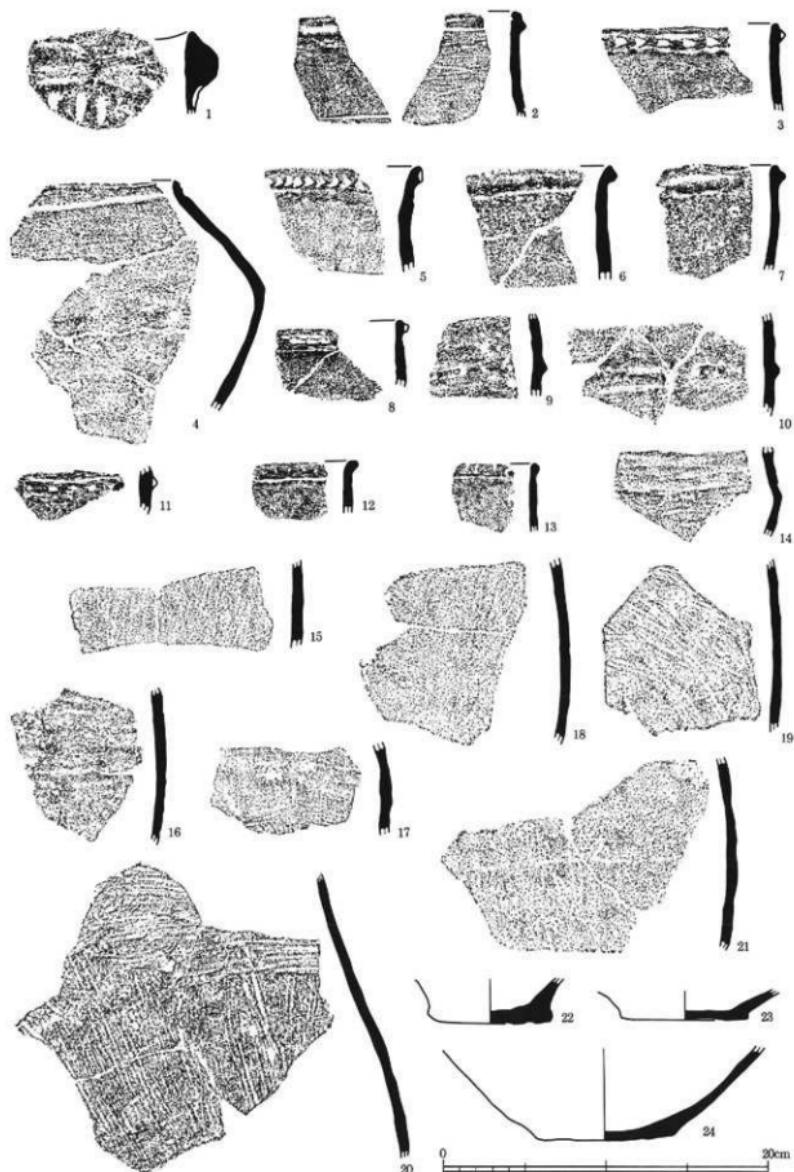


Fig. 26 NR1302出土遺物実測図

い流水によって、比較的短時間の内に流路を変えていた可能性も考えられる。

Tr. 2 では堆積層の上層にVI層を基盤とした S D 1305の切込みがみられる。またその南東側では、N R 1302をVI層下面から直接に切り込む小溝の存在することが、断面観察より明らかとなった。しかし、この溝については人為的なものか否か、また形成時期など、性格付けは全く不明と言わざるを得ない。またTr. 1 の南端部ではVI層をベースとし、N R 1302を切って流れる形成時期不明の自然河川N R 1303が存在するが、これについては一部を平面的に検出した。Tr. 2 の中層以下に厚い堆積をみせる有機質で構成されたラミナからは、多數の植物種子を採取しており、その樹種の特定を通じて当時の環境復原を試みている(分析篇第4章)。

2. 遺物(Fig.26, PL.61)

遺物としては両トレンチの河道内堆積土中より、中期末～晚期の縄紋土器片の出土をみている。またN R 1302と一部が重複する S D 1305の堆積土中や、A - 3 区 VI層の直上からも晚期の縄紋土器片が検出された。流路以外から出土した縄紋土器については、出土地点が全て A - 3 区に限定されていること、N R 1302から検出された縄紋土器と帰属する時代が一致すること等から、いずれもN R 1302の流路堆積物に包含されていた土器が遊離したものとみなして大過ないであろう。縄紋土器はその他にも層序の項で述べた如く、B 地区においてIV層内に微量の混入が認められている。しかしこれらは時代決定が不可能なほどの極細片であることから、本項ではN R 1302に関連した縄紋土器のみについて扱う。いずれも数量的には僅少であり、また縄紋時代の産になる石器の類は全く出土しなかった。

1 は中期末に属する北白川C式の深鉢で、今回の調査で出土した全遺物中で最古の土器である。この深鉢は、口縁部外面に隆帯を貼付けて横位の区画紋を配する。左右の区画紋に挟まれた境界部分では、口縁端が緩やかに上方に拡張され、この部位が小さな波頂部をなす可能性もある。区画紋より下部の胸部には継位の太い沈線を施している。出土縄紋土器の中で唯一激しく摩耗し、また同時代の土器片も他に皆無なことから、中・上流域から漂着した土器で遺跡周辺に由来するものではないと考えられる。

2・3は船橋式の深鉢である。2は口縁端部外面のやや下方に突帯をもち、また突帯の下方に1条の沈線がある。内面は横位の条痕が施され、口縁のやや下方に1条の沈線を設ける。3は口縁端部外面のやや下方に刻目突帯を有しており、刻目は明瞭に刻まれたD字状を呈している。4は口縁から体部までを残した鉢で、口縁のやや下方の外面に1条の沈線を有する。体部上半は緩やかな稜線で画された最大径部から直線的に内傾する口縁に至る。口縁端部は短くやや上方に屈曲している。

5~13は長原式の突帯紋土器である。僅かに外反する口縁端部外面に接して突帯を貼付けた5・6、直線的な形状に延びる口縁端部外面に沿って貼付け突帯を設けた7・8、胸部突帯を有する9~11、口縁端部外面に丸味を帯びた小さい突帯を設けた12・13がある。突帯に施された刻目は、明瞭なD字状の5と、疎らで軽く刺突された8・11以外も、いずれも刻目を有するとみられるが不鮮明である。

14~21は条痕、あるいはケズリで外面を調整した深鉢の胸部である。これら胸部片はいずれも概ね晚期の範疇で捉えられよう。

底部は出土した3個体すべてを図化した。22・23は底面が平坦、もしくは平坦に近い凹面状であるが、24はやや凸面状を呈する。24の内面には全面に細かいケズリによる調整が観察される。

土器様相は以上のように、僅かに北白川C式・船橋式と考えられる縄紋土器片を含んでいるが、全体的にみれば出土遺物の主体は長原式にあり、N R 1302の帰属時期は晩期末に特定できる。なお、前期の弥生土器は全く検出されていない。